令和４年度　教育研究活動の現状と課題

― 自己点検・評価　報告書 ―

令和５年４月

常磐会学園大学

は じ め に

本学では、「子どもに共感できる実践力のある保育者・教育者を育てる」ことを目標として取り組みを進めています。授業では、「子どもに学び、子どもと共に歩む教育の素晴らしさ」を伝えることを大切にしています。

また、時代のニーズにあった特色ある大学づくりに努めています。英語の基礎的な授業はもとより、ネイティブスピーカーを交えて英会話の楽しさを知るなど英語力を高めることを重視しています。タブレットなどICTを活用した授業づくりも、重要な柱として取り組んでいます。そのような取り組みを通して、教職員はもとより、学生も自己研鑽に励み、研究を進めております。

この度、平成１４年の創刊以来本年度で２０回目となる本学の教育・研究実践のまとめを発行する運びとなりました。本報告書ではタイトルを「教育研究活動の現状と課題」としています。本学における自己点検・自己評価の内容・方法として、「教育研究活動の計画」「教員の研究分野・内容・実績」「授業評価」「キャンパスライフの調査」「FD・SD活動」のそれぞれ５つのジャンルからまとめています。

「教育研究活動の計画」では、大学の教育活動・研究活動のより一層の充実に向けて、各部署において達成目標を定めています。その目標にそって、具体的な取り組み及び進捗状況を報告し、達成状況や課題について協議し次年度の課題をまとめています。

「教員の研究分野・内容・実績」では、専任教員の校務分掌や研究活動の具体的な取り組みを紹介し、加えて専門領域や研究実績が詳細に示されています。

「授業評価」では、教員自身の授業の向上及び授業の改善に資するため、専任・兼任教員の各授業に対して、学生による授業アンケートを実施しています。このデータ結果をもとに授業改善が図られ、より良い授業が展開されるものと期待しています。

「キャンパスライフの調査」では、学生生活全般にわたってキャンパスライフの満足度を調査し、結果を公表しています。今年度のキャンパスライフ調査ではアンケート項目「学生参加形式の授業が多かった」の結果が注目されます。肯定的な回答の割合が 92.4%ありました。特に否定的な回答の中の「あてはまらない」とした学生数が大学全体で０名でした。これは、本学のアンケート調査を始めて以来、初めてのことです。「考える・話し合う・発表する」という授業形式の実践が、教員と学生の共通した認識となっていると言えます。その他、「授業の工夫がある」や「興味関心が持てる」等の指導方法などに関する項目についても肯定的回答が 8 割近い割合を占めています。このような参加体験型の授業実践が行えている背景には、コロナ感染症への対策など保健センターや学生部・事務室などすべての教職員のきめこまやかな対策がありました。

その他にも、キャンパスの学修環境が向上し施設設備の充実が促進され、毎年学生の満足度が上がってきています。

本書をご一読いただき、ご批判を賜りますようお願いいたします。

常磐会学園大学　学長　大森　彰

目　　次

はじめに

Ⅰ　教育研究活動 …… 1

Ⅱ　教員の研究分野・内容・実績 …… 23

Ⅲ　授業評価 …… 45

Ⅳ　キャンパスライフの調査 …… 55

Ⅴ　FD・SD 活動 …… 67

おわりに …… 73

Ⅰ　教育研究活動

「教育研究活動」の取り組み

この章では本学の教育研究活動、特に校務分掌における各部署の組織的な活動について報告する。

報告するのは、学長を中心とした「大学経営」、本学専任教員からなる「教務部」「学生部」「研究部」「入試部」「進路・実習指導部」、学長より委嘱された委員からなる「人権教育推進委員会」、学生の様々な活動を支援するために教職員で構成された「自己点検」「学生支援」「地域貢献」「現職支援」「課題推進」「図書館運営委員会」、事務局の「総務課」「教学課」「会計課」「入試広報課」の 17 部署である。

表には、今年度の目標、その目標達成のための具体的な取り組み、そして 1 年間での進捗状況、さらにそれに対する各部署の達成度の自己評価、最後に次年度の活動における課題がまとめられている。達成度は「A」「B」「C」の 3 段階で自己評価しており、それぞれ「目標以上に達成できた」「目標を達成できた」「目標達成に至らなかった」となっている。また、各部署の活動は必ずしも単年度で終了する活動とは限らず、達成度の評価が「C」にとどまっている活動もある。なお、そのような取り組みについては、次年度以降「A、B」に到達できるように継続して活動することとしている。

また、本学では各部署の年間計画や活動の進行状況について情報を共有し、その活動の進行状況や結果等について意見を交換する機会として「教育研究活動の計画全体報告会」を年 3 回、原則として全教職員の出席で実施している。今年度は、年間計画を報告し合う第 1 回報告会を 6 月 1 日、進行状況の中間発表を行う第 2 回報告会を 11 月 16 日に、年度を通じての達成状況を報告する第 3 回報告会を 3 月 1 日に開催した。原則として全教職員に出席を求めて、活発な意見交換もしながら、情報の共有と全学的な教育研究活動への意識の醸成が行われた。

01. 大学経営

令和４年度の目標			
平和と人権尊重を基盤に、グローカルな視野を持つ人材の育成を目指す。定員充足をめざして取組みを進める。英会話・ICT 等を含めた多文化コミュニケーション力を高め進路保障の充実に努める。			
	具体的な取り組み	進捗状況	評価
①	【積極的な学生募集】 ・教職員全員が入試部という意識で、一丸となって来年度入学生 120 名を確保する。 ・300 人の来校者を確保できるオープンキャンパスの広報、内容の充実を図る。	・全教職員が一丸となって学生募集に臨みオープンキャンパスで高３生（実人数）229 名の来校者を得た。115 名の入学予定者（編入を含む）を獲得した。高校訪問・ガイダンスを重ね、丁寧な対応の成果である。	B
②	【授業力と学生満足度の向上】 ・「楽しく、学びがある」授業づくりを進める。学生が主体となり互いにアウトプットできる授業づくりを探求する。 ・ネイティブスピーカーの活用を進める。 ・ICT 教育を推進する。	・キャンパスライフアンケートでは、「学生参加の授業が多かった」において、今までにない成果が出されていた。学生の学びを確かなものとする授業に取り組めた。 ・ネイティブスピーカーの活用を進めた。 ・ICT を活用した授業の研究に努めた。	B
③	【学生の実態を把握し進路支援を強化する】 ・学生の様々な実態の把握と情報の共有化を図り、教職員全体で支援していく。 ・個に応じた進路保障を進める。学生の希望が叶う支援を通して本学の評価を高める。 ・コロナ感染者の実態を把握し、適切に対応した取り組みを進める。	・学生の実態を把握し、学内全体での情報の共有化に努めた。各実習において、学生を支援することができた。問題と思われる事象にも適切に対応することができた。 ・進路支援において、すべての学生の希望が叶うよう取組みを進めた。 ・コロナ感染について適切に対応できた。	B
④	【認証評価受審に向かう体制づくり】 ・２０２３年度の受審に向けて、大学評価委員会を中心に教職員全体で取り組む。 【地域と連携し、地域に貢献する大学】 ・平野区等との連携を強化していく。	・認証評価に向け、内部質保障の実質化に取り組み自己点検・評価を進めた。 ・平野区との地域連携、公開講座等の取り組みを進めた。学生のボランティア活動をさらに推進していく必要がある。	B
⑤	【３ポリシーの充実】 ・「アドミッションポリシー」「カリキュラムポリシー」「ディプロマポリシー」の実質化を進める。 【短期大学との連携】 ・統合準備室・将来構想検討委員会をもとに統合に向けての取り組みを進める。	・授業アンケート等における学生の意見を大事にした取り組みを進め、「学生のための内部質保障」「学修者本位の教育」へと学生主体の学校づくりに取り組んだ。 ・令和７年度統合に向けて、統合準備室、学長室会議などにおいて協議を重ね、学園全体の発展と創造を追求した。	A
次年度の課題			
インパクトのある戦略的広報を展開し、130 名の入学者を目指す。学生の英語力を高める教育を強化し、ICT を活用した授業を推進する。公立保幼・小学校採用試験等の合格率を高め進路を保障する。			

02. 教務部

令和４年度の目標

学生が志望する進路に向け免許・資格の取得ができる履修指導への支援体制を整え、学生の授業への満足度を高める。

	具体的な取り組み	進捗状況	評価
①	【教育課程・シラバス】 ･教育内容が適切かどうか確認し、必要があれば関連部署と連携し、適時変更していく。 ・感染症対策でのオンライン授業にも対応出来るように環境の整備､研修の実施を進める。	・教育内容は、随時確認し、必要があれば関連部署と連携できた。 ・ICT 教育検討委員会において 7 月タブレット講習会、10 月 teams 講習会を開いた。	A
②	【履修】 ･学生が計画的に履修できるように、時間割編成、履修手続き、履修に関する指導などについて適時、見直していく。	・履修の手引きで誤りがあり、追加授業や履修の手引きの変更をおこなった。時間割編成､履修手続きについては､適時見なおした。	C
③	【基礎・専門演習・研究室】 ・入学前登校では、入学後の学修に向けて高大ギャップをなくすような学修内容を検討・実施していく。 ・基礎演習の内容を適時見なおし、専門演習の学びや進路へ繋がる基礎的な能力の習得を目指す。 ・専門演習は、ミニ論・卒業論文・報告会の質の向上を目指し､指導内容や報告会の実施方法、評価基準についても検討していく。	・入学前登校では、高大ギャップをなくすような学修内容にして実施した。 ・基礎演習の学修を進めている状況で、適時見直しをした。。 ・専門演習 I で 5 月と 11 月に論文指導の講習会を開いた。ミニ論報告会・卒業論文報告会は、開催できた。	B
④	【学外研修】 ・海外研修や学校・企業インターンシップなどの参加者を増やし、支援していく。 ・学校・企業インターンシップについての内容・制度を見なおす。	・インターンシップについて、他大学の内容・制度について情報を収集して、来年度に制度を見なおす方向性に留まった。	C
⑤	【教育評価】 ・本学の学修評価の現状分析を行ない、学生が自らの学修を分析し､捉える基準となる学修評価を提案していく。 ・教職課程を履修する学生がおこなう教職課程ポートフォリオについて再考する。	・現在、学修評価については、情報収集の段階に留まった｡教職課程ポートフォリオについては､来年度運用できるように計画している。	C

次年度の課題

学生が志望する進路に向け免許･資格の取得ができる履修指導については、随時見直し、最善になるようにしていく。今後、ICT を用いた授業が多くなることから適応した学修内容・指導等を再確認し、学生の授業への満足度を高める。

03. 学生部

令和４年度の目標

学生と学生の自主的活動への継続的な支援を研究室、学生相談室、カウンセラー、保健センター、教務部、事務室との連携の中で行う。

	具体的な取り組み	進捗状況	評価
①	【研究室指導】 ・各年次の実情に応じた指導を進める。 ・個人面接の充実と記録を整理していく。 ・コロナ禍においても学生との関わりを大切にし、連絡を密にする。	・各年次の実情に応じた指導を進めた。 ・各教員が学期開始時・随時に、個人面接を実施し、個人ファイルに記録している。 ・通常授業の中で、教学課・教務部と連携し、情報共有している。	B
②	【学生生活】 ・研究室・保健センターや学生相談室と連携し、学生支援の充実を図る。欠席が多い、配慮が必要　などの学生を把握し、支援する。 ・新型コロナウイルスの状況に応じて形態を検討・改善し、大学行事（英語スピーチコンテスト、ディベート大会）を実施する。	・各部署が連携して学生の支援にあたっている。状況に合わせて新型コロナウイルスに関係する欠席、自宅待機のルールの見直しを行った。 ・7 月 6 日(水)、生配信で英語スピーチコンテストを開催した。ディベートは、昨年度同様教務部企画で 11 月～12 月の基礎演習時に研究室単位で実施した。	B
③	【自治会活動】 ・自治会役員、自治会の自主的な活動を支援する。 ・コロナ禍においても、学生の主体性を生かしトキガク祭などの行事を活性化する。	・現自治会役員の下回生増員を図っている。 ・10 月 22 日(土)に「トキガク祭」を開催した。3 年振りのほぼ通常開催（感染対策有り、飲食無し）及び昨年度に引続き、短大と一部合同で実施した。課題もあるが、学生が主体的に行うことができた。	B
④	【ボランティア】 ・地域のボランティア情報を状況に応じて提供し、参加を呼びかける。 ・ボランティア活動に対しての各種補助金の活用を、積極的に進める。	・学生に対してボランティア情報を提供した。 ・各種補助金の活用については、継続してまとめていく。	B

次年度の課題

コロナ禍での取り組みも活かしながら、学生の自主的活動を支援していく。

04. 研究部

令和４年度の目標 研究活動の活性化を図り、授業内容向上への取り組みを進める。			
具体的な取り組み		進捗状況	評価
①	【研究紀要】 ・投稿論文数の増加を図るとともに、公開の取り組みをさらに進め、研究紀要を充実させる。	・論文数は、11 編（昨年度 12 編）の投稿応募があり、そのうち査読論文は１編であった。発行に向けて編集作業を進めている。	B
②	【授業研究】 ・全教員による公開研究授業を実施するとともに、授業力向上のための研修を行い、FD に資する。	・全教員参加による「授業力向上研修」を春期に行った。 ・秋期に「公開研究授業」を実施し、40 件の授業公開があり、提出された 37 件の見学コメントの公表を行った。	B
③	【授業アンケート】 ・アンケートの実施に関して、教育の質の向上につながる方策を検討する。 ・調査結果を分析し、その結果を報告するとともに授業改善に活用していく。	・春期の授業アンケートを実施し、その結果の分析と報告を実施した。専任教員のアンケート結果とコメントを学生にも公表した。 ・秋期の授業アンケートも同様に実施をした。	B
④	【キャンパスライフに関するアンケート】 ・アンケートの回答数を増やす取り組みを進める。 ・学生の満足度向上につながるよう調査結果を分析・報告し、教育活動の改善に積極的に活用していく。	・アンケートの回答を増やす働きかけをし、昨年度 50.3%から今年度 63.2%に回答率を向上させた。 ・結果を速やかに公表し、学生の要望や不満を集約して対応を回答した。	B
⑤			
次年度の課題 研究活動の活性化を進め、授業内容充実のための取り組みを続ける。			

05. 入試部

令和４年度の目標

入試広報課および関係部署と連携しながら広報活動を強化し、12 月までの入試（総合型選抜・学校推薦型選抜）において来年度の入学定員を確保する。

	具体的な取り組み	進捗状況	評価
①	【入試選考】 ・すべての入試選考を適正に実施する。 ・総合型選抜のエントリー者・出願者増を図るため、合格者入学金免除制度の事前予約を適切に導入する。 ・指定校推薦基準を見直し、受験者増を図る。	・すべての入試選考を適正に実施した。 ・総合型選抜合格者入学免除制度の事前予約を導入し、101 名の予約があった。 ・総合型選抜に 81 名がエントリー、77 名（昨年同時期 62 名）が出願し、学校推薦型選抜指定校に 30 名（昨年 25 名）が出願するなど出願者増に成功し、3/1 時点で 1 年次 113 名、3 年次編入 2 名の入学予定者を確保した。	B
②	【ＯＣ】 ・新型コロナ感染拡大防止に配慮しつつ、OC 来場者の満足度向上を図る。 ・魅力的な体験授業の拡充と、効果的な事前告知を実施する。 ・学生スタッフの拡充と主体的参加を引き出し、来場者対応力の向上を図る。	・事前予約・アテンド制の OC を実施し、学生スタッフも意欲的に対応した。アンケートでも来場者の満足度は毎回高かった。 ・シリーズ化した体験授業を導入し、OC 告知に体験授業予定を掲載した。 ・ＯＣ参加者数（延べ）は高校生等 460 名（昨年 366 名）、保護者 220 名（昨年 178 人）であり、大きく増やすことができた。	A
③	【学校訪問・高大連携】 ・高校訪問に加え、高校ガイダンスへの大幅注力を継続する。 ・アクセスオンラインを積極的に活用して、効果的な高校訪問・広報活動を行う。 ・新規の連携校獲得を図るとともに、連携校の要望に応える高大連携を推進する。	・高校訪問を３期にわたって実施し、高校への PR や受験者動向の把握に努めた。高校ガイダンスには 2 月末までに教職員合わせて 181 件（昨年 182 件）参加した。 ・アクセスオンライン活用のための教員向け説明会を 11/16 に実施した。 ・公立高校を中心に 27 校と新規に連携契約を締結し、連携校を大きく増やした。	A
④	【学生募集・大学広報】 ・キャンパスガイドなどの広報ツールをさらに充実させ、高校生への訴求力を高める。 ・英語教育推進、音楽講座の実施、通学バス運行など新たな取り組みを効果的に発信する。	・地域の高校生向け音楽講座を開講し、4 回実施、延べ 21 名の高校生が参加した。 ・入学定員に近い入学予定者を確保したが、高校生への訴求力をより高めるキャンパスガイドの制作に取り組んでいる。	B
⑤	【高大接続】 ・今年度入試の運用結果を踏まえ、次年度以降の入試方法及び経済的支援制度の設計・改善に継続的に取り組む。	・総合型選抜の配点変更、一般選抜３期制への変更等、次年度入試の改善に取り組んだ。 ・総合型選抜等の入学金免除制度の継続、海外留学費用支援の導入など次年度入試に関連する経済支援制度の充実に取り組んだ。	A

次年度の課題

ＯＣ参加者数の増員を図るとともに、連携校への働きかけを強める。

06. 進路・実習指導部

令和４年度の目標

・新型コロナウィルスの感染動向を踏まえ、学生のより豊かな実践的体験のための実習実施を図る。

・進路が確かなものとなるように積極的な指導をしていく。

	具体的な取り組み	進捗状況	評価
①	【実習指導室】 ・保育・教育実習に向けての指導や進路について関連する科目と連携し、個別又は少人数で指導を行う。	・春期に動画視聴で保育所生活を理解し、日誌の書き方等への指導を進めた。秋期においては施設ごとの役割を理解し、チェックシートを活用しながら業務に向けての認識が理解できるよう少人数での指導を進めた。	A
②	【教職教育研究センター】 ・将来の進路に向けて１年次生からキャリア教育を進める。 ・教員・公立保幼採用等進路の確保に向けた、効果的な取り組みを行う。	・基礎演習Ⅰ・Ⅱでキャリア教育を実施した。Ⅰでは４年間のスケジュールの周知、Ⅱでは保育教育の現場を知り、進路と向き合った。 ・新規にスタートアップ講座を行い、小学校教員や公立保幼の進路に向けて意識の高まりを図った。春の対策講座は 198 名の参加者を数え前回の対策講座に比して 2 倍の参加数となった。 ・小学校教採合格者は延べ10名であり（前年度９名）、公立幼保合格者（期限付含む）は実数８名を数えた。	A
③	【実習】 ・実習関係する指導の充実を図る。先修条件の充足、実習事前・実習中・事後、教育実習の内諾について指導の充実を図る。 ・教職課程を履修する学生がおこなう教職課程ポートフォリオについて再考する。 ・円滑な実習ができる体制に努める。 ・２月に実習協議会を実施する。	・教育実習はほぼ終えた。保育実習に臨むための先修条件不足の学生には注意喚起と共に指導を徹底した。 ・教職課程ポートフォリオはできていない状況であり来年度を予定している。 ・配慮を要する学生の掌握に努めた結果、いずれの実習も予定通りに終了できた。実習中の経過については教職員が情報共有し事後の対処に努め、会議等で周知した。 ・２月 15 日に実習協議会を実施した。	B
④	【ボランティア】 ・進路を考えるためにボランティア・学校インターンを学生に推奨する。現場での体験をより豊かにするため、早い時期からの参加を強く勧める。 ・短大付属園等との連携強化を図る。	・教育実習のためのボランティア活動は年度当初より勧奨した結果、95％以上が期限までにやり終えたという結果であった。 ・常磐会幼稚園の「夏祭り」のボランティアの要請はなかった。科目等の連携によって、そこからのボランティアを呼び掛けている。	A
⑤	【進路支援センター】 ・教員と学生情報や就職情報を共有し、連携して学生一人ひとりの想いを大切に進路指導を進める。 ・就活に対し高い意欲で臨むように、進路ガイダンスの実施や、就職フェア・ボランティア活動（インターンシップ）の参加を促していく。 ・教採セミナーを充実させ、学生の公務員採用試験への意欲を支える。	・学生の多様な希望に対応し、進路相談を進めている。３年次生の個別面談を 11～12 月にかけて実施した。 ・大阪府等の教員採用試験説明会を本学で実施し、受験に向けての意識を高めることができた。 ・教採セミナーは、春期は４回生に向けて集中で開講して指導を行った。秋期は３回生に向けて、英語と数学の２教科を２クラスずつ、学生に合わせた講座を行った。	A

次年度の課題

早い段階から学生自身がキャリアについて考えるためにボランティア活動を推奨する。より良い実習指導ができるように教職員全員で意思統一して指導することを進める。また教員採用試験、公立幼

07. 人権教育推進委員会

令和４年度の目標

人権に関する意識・感覚の向上と能動的行動につなげる人権教育に取り組む。

	具体的な取り組み	進捗状況	評価
①	【教育・研修の企画】 ・学生及び教職員を対象とした人権教育研修会を企画し、開催する。 ・学生に対する人権啓発教材の研究及び啓発活動を進める。 ・研修及び啓発活動にあたって、新型コロナウイルス感染防止に配慮した方法を検討する。	・1 月 18 日(水)2 限目に、学生対象の人権教育研修を、藤野高明氏をお迎えし、開催した。 ・当日は、新型コロナウイルス感染防止の観点から対面及びオンラインを併用したハイフレックス型で実施した。 ・教職員を対象とした研修会については開催することが出来なかった。	B
②	【実践につなげる取り組み】 ・人権に対して能動的に行動する学生の育成を目指し、学生らが人権教育の学びを実践する機会について情報提供する。 ・平野区の人権に関する取組みやイベントに学生の参加を促し、地域との交流を図る。	・学生に向けた人権啓発や福祉的なボランティア活動の機会を積極的に提供していくことを目指したものの、具体的な形にすることが出来なかった。	C
③	【役割等の見直し】 ・人権教育推進委員会が創設されてからこれまでの経緯を振り返り、会の役割、規定などについて検討し、整理する。	・他学の人権相談の窓口や、取り組み等について確認、調査分析を実施したものの、具体的に、委員会内で共有・議論を深めることができなかった。	C
④			
⑤			

次年度の課題

・引き続き学生向けの研修会を開催するとともに、教員向けの研修会についても開催を検討する。
・学生に具体的な活動の場を提供する。

08. 自己点検

令和４年度の目標 教職員の組織的協働を進め、大学の教育力を高める。			
具体的な取り組み		進捗状況	評価
①	【大学評価】 ・教育研究活動の推進につながる自己点検・評価を進めるとともに、来年度に受審する外部評価に向けた準備を行う。	・各期に分掌ごとに自己点検・評価を行っている。 ・年度末に一応のまとめが発表できるよう、外部評価に向けた準備を計画的に行っている。	B
②	【ＦＤ・ＳＤ】 ・教職員が協働して大学の教育力を高める。 ・各教員は、学生の能動的学習の取り組みを積極的に進める。 ・組織的な SD 研修を行う。 ・教育力向上につながる FD 研修を行う。	・大短全教職員対象に ９月 16 日統合ワークショップ ２月 27 日統合準備室からの報告会が開催された。 ・8 月 17 日に授業研修会を行い、学生の能動性を引き出す授業について学び合った。 ・11 月 7 日～18 日　公開授業週間	B
①			
②			
次年度の課題 ・大学評価　外部認証評価を受審することを通して、多角的に大学教育の質を考え、高める。 ・ＦＤ・ＳＤ　引き続き、教職員が協働して大学の教育力を高める。			

09. 学生支援

令和４年度の目標

・関連部署と連携し、支援が必要な学生に対して適切な支援を行う。
・学生支援にかかる危機管理マニュアルの作成を検討する。
・新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、学生が自分で健康管理できるように指導する。

	具体的な取り組み	進捗状況	評価
①	【学生相談室】 ・研究室担当教員、保健センター、「そらいろ」 事務室など各部署と連携し、情報の共有を速やかに行い、学生を全学的にサポートする。	・月～金、担当教員が学生相談室を開いた。 ・日常的に関係部署が連携し、学生をサポートしている。 ・2月1日(水)学生相談室連絡会を開き、学生の状況を共有した。	B
②	【カウンセリングケア】 ・実習、学生生活の必要に応じて、支援が必要な学生の情報を迅速かつ適切に関係部署で共有する。	・教育実習、保育所実習にあたり、関係部署が連携し要支援の学生について支援の在り方を検討した。それに沿って、実習先と必要な情報を共有するなどした。	B
③	【保健センター】 ・昨年のＵＰＩ調査結果と、今年度のＵＰＩ調査結果に顕著に変化がある学生や１回生で気になる学生を中心に面談等の対応をすすめていく。 ・保健センターだより等を通じて、コロナ感染症予防の生活様式が定着化するよう、また食物アレルギーに関する知識や安全な環境について意識を高められるよう努める。 ・毎月の保健センターの個人別利用をもとに、「そらいろ」との連携を深める。	・ＵＰＩの調査結果をまとめ、研究室での面談資料にしていただいた。また、実習前の問診表の回答とも合わせて気になる学生には面談を行った。 ・保健センターだよりや昼食時を利用しての学内放送により、マスク着用・マスク会食が習慣化されるよう、感染予防を呼びかけた。また、学園祭においては、模擬店ごとに学生とともに感染予防法を考えた。 ・心理的不安を訴える学生が増える傾向にある。学生一人ひとりに寄り添うことに努めた。さらに「そらいろ」をはじめ関係部署との連携を密にし、共通理解のもと対応を すすめた。	B

次年度の課題

・保健センター前掲示板や大型テレビを活用して、生活習慣や免疫など保健に関しての意識を高めたい。
・保健センターに来室して相談する学生の対応をするだけでなく、欠席しがちな学生に声をかけるなどして、心に不安を抱えている学生の早期発見対応を心がけたい。

10. 地域貢献

令和４年度の目標			
平野区をはじめとして、大阪市、八尾市、松原市との地域提携をより充実させ、地域における大学の役割を果たす。			
	具体的な取り組み	進捗状況	評価
①	【地域貢献 Project】 平野区をはじめ、大阪市、八尾市、松原市との地域協定の強化を図る。 ・平野区との地域貢献プロジェクトの会合をもち、平野区との地域協定に基づく各種の取り組みに参加する。 ・喜連村史の会と連携した授業「喜連村フィールドワーク」の充実 ・「子育て支援事業」「子どもフェスタ」「健康まつり」等に教員・学生を参加させる。 (平野ミュージックステーション) ・平野区学力サポート事業に学生を参加させ、子ども共に学ぶ場とする。 (第８回子ども(小中)英語スピーチコンテスト)	「喜連村史の会」新型コロナ感染拡大により中止 8 月 3 日平野区との地域協定に基づく会議を 開き、各種取り組みについて確認した。 10 月 29 日第 47 回平野区民まつりに学生 4 名大学では初めての参加。 11 月 26 日　平野区　中学生・小学生英語スピーチコンテスト決勝戦 参加申込者（計 51 名）過去地域から最高の申し込みがあり事前予選 （小学生 A：18 名／小学生 B：28 名／中学生：5 名）オンラインにて実施 12 月未定　平野ミュージックステーション 2 月 8 日保育所への演奏発表会は未定 今年は、新型コロナ感染拡大により、各イベントや学力サポート事業が中止、 また教員・学生の参加抑制。	B
②	【こどもセンター】 ・子どもの遊び環境を整える （おもちゃ作りなど）	新型コロナ感染拡大により抑制していたが、園庭あそび、伝承遊び、親子とあそぼ 1 歳さんなど地域にむけての子育て講座がリスタート、イベント等含め徐々に活発に動き始めた	B
③	【教育センター】 ・公開講座を開講し地域住民の生涯学習に貢献する。 ・地域住民のニーズに応える講座を開講する。	昨年 10 月末よりリスタートした。 講座によっては、定員を 4 倍オーバー 抽選が出るほど人気が上昇中。今後も地域へのアカデミックな貢献を続けていく。	A
次年度の課題			
コロナ禍が落ち着いてきたので、今年度と同様またはさらに展開していきたい。			

11. 現職支援

令和４年度の目標

・常磐会短期大学及び本学を卒業した現職はもとより、現場で勤務する教職員等の支援をする。

・支援された方々が、「常磐会で学んでよかった」と思える充実した研修内容に努めていく。

	具体的な取り組み	進捗状況	評価
①	【現職教育】 ・NPO「小学校教員の英語力を伸ばす会」と協賛し、平野区の小学校を中心に夏休みなどに、対面型の研修会を開催する予定である。	・研修開催予定の夏休み前からコロナが猛威をふるっており、研修会の企画・実施は困難な状況であった。With コロナを念頭に、次年度に向けて、研修会を計画・立案した。	A
②	【新たな学び】 ・教員免許更新制が発展的に解消され、新たな制度に参加する。大学・短大と連携し、制度について情報収集、本学園に求められている現職教員自らの振り返りや学びにつながる研修内容を検討し、実施する。	・常磐会学園大学・常磐会短期大学の所属教員による 23 項目の講習内容を公開した。オンデマンド型オンライン講習でおこなっているところであるが、参加者は予想を大きく下回った。	B
③			
④			

次年度の課題

従来の免許更新講習に比べて参加者は予想をはるかに下回った。何らかの現職教師支援のための学習コンテンツの企画については、常磐会学園大学・常磐会短期大学が今後の方向性を検討していく。

12. 課題推進

令和４年度の目標

各課題を検討・推進し、大学の魅力を高める。

	具体的な取り組み	進捗状況	評価
①	【ICT 教育推進・ICT 委員会】 令和の学びにふさわしい環境整備および教職員・学生におけるスキルの検討及び育成。 ・教職員・学生における ICT（情報通信技術の使い方）のスキルアップ ・教育・保育現場における ICT の現状を把握し、大学授業での活用を推進していく。 ・ICT を推進するための学内環境等の整備	・教員のスキルアップの為、7 月にタブレット講習会、10 月に Microsoft Teams 講習会をおこなった。 ・教育現場における ICT の現状を把握の為、6 月に関西大学初等部、8 月に関西教育 ICT 展に参加等をして情報を収集した。 ・ICT 推進するための学内の環境整備は、来年度実行していく。	B
②	【多文化コミュニケーション-英語を手がかりとして】 学生が気軽に英語に接する環境を整え、多文化コミュニケーションの一端に触れる。	・基礎演習の時間に各研究室、各期 3 回ずつ英語コミュニケーションの時間を創設した。 ・毎週水曜日、英語サークルの学生を中心に外国人講師と交歓した。	B
③	【海外研修】 3 年ぶりの海外研修プログラムが、安心・安全で、学生にとって実りある研修となるよう計画・実施し、そのためのサポートを行う。	・学生 4 名が、NZ ワイカト大学語学留学に本学事前研修を経て参加、無事その課程を修了して帰国した。現在、事後研修を終えて単位取得済。次年度は、コロナ規制も緩和される。実りある海外研修の実施を目指して計画を進めている。	B
④			

次年度の課題

・ICT 教育推進　引き続き教職員・学生のスキルアップを図る。学内の環境整備は具体的に進捗がある予定。

・多文化コミュニケーション-英語を手がかりとして　英語に親しむ更なる取り組みを充実させる。

・海外研修　実りある海外研修を実施する。

13. 総務課

令和４年度の目標			
・授業用の教員貸出 PC、小学校実践室のタブレット購入 ・ファイヤーウォール、事務サーバーの更新 ・LED 照明の更新、トイレの洋式化 ・受付業務、清掃作業、用務作業の整理 ・修繕計画の作成と学園全体を通しての修繕の優先順位の検討及び使用施設の提案と整理			
	具体的な取り組み	進捗状況	評価
①	【備品・施設設備の整備】 〇授業用の教員貸出 PC、小学校実践室のタブレットの購入 〇ファイヤーウォール、事務サーバー更新 〇LED 照明の更新、トイレの洋式化 〇301,302 へ板書用黒板の取り付け 〇多目的講義室プロジェクター更新 〇理科室、小講義室（1 か所）プロジェクター更新	・ほぼ完了した。 ・理科室のプロジェクター取付のみ残っている	A
②	【業務の整理】 〇受付業務、清掃作業、用務作業の整理 ・用務作業を分解し、修理と植栽以外は清掃作業とし、ほぼ業務委託した。 清掃作業は、一部を除いて午前の短時間勤務にし、午後のゴミ出しのみ学園の兼任職員に依頼するなど短大と連携を図り、人手不足と仕事時間を効率化する。 ・受付にノート PC を設置し、これまで手作業で行っていた業務を電子化し、事務作業の簡素化と作業時間を効率よくした。	・形を整え都度の見直しをしながら順調に進んでいる。これらの業務は、昔から短大と連携して行っているので、これをモデルに大短双方で改善をはかりたい。	A
③	【更新計画・修繕計画（短大との連携）】 〇修繕計画の作成と学園全体を通しての修繕 の優先順位の検討及び使用施設の提案と整理	・短大総務課と施設ミーティングを行うことで総務課レベルの工事等の情報を共有できるよう努力しているが、工事資材の高騰や統合に向けての話し合いがまだ施設使用についてまで及んでないこともあって、双方で修繕の優先順位をつけるにいたってない。そのおかげで、大学が提案した来年度修繕計画はほぼ認められた。修繕履歴は今年度を含め過去 10 年を洗い出せた。現在は種別にふるい分けを行っている。	B

次年度の課題

○101.102.301.302.303 講義室机・イス入替

○Ｗｉ－Ｆｉ開放工事

○アクティブラーニング室用タブレット購入

○2 号館照明とグランド投光器 LED 改修工事

○2 号館トイレ洋式化工事

○1～3 号館渡り廊下漏水改修工事

○3 号館加圧給水ポンプ整備工事

○建築基準法第 12 条指摘事項改修工事

（1 号館屋上トップ防水補修工事、1～3 号館浮きタイル補修他）

○修繕計画の作成と学園全体を通しての修繕

○受付業務、清掃作業、用務作業の整理　他

14. 教学課

令和４年度の目標

・教務部、進路・実習指導部、学生部等と連携し、総合的に学生をサポートする体制を強化する。
・学生、教職員がトキガクポータルを更に積極利用するよう、引き続き啓発する。

	具体的な取り組み	進捗状況	評価
①	【教務部、進路・実習指導部との連携】 ・学生の希望する免許・資格が取得できるよう、教務部、進路・実習指導部と連携して履修登録の支援や免許・資格・卒業条件等の履修状況把握を行う。	免許・資格・卒業条件等のチェックは概ね問題なく行えている。実習の先修条件確認がうまくできていないので、チェックの仕方を検討する必要がある。	C
②	【学生対応】 ・支援等を要する学生について、教職員・保健センター・学生部（学生相談室）と情報共有を密にする。 ・学生情報を課内で共有し、個に応じた学生対応を行う。 ・学内外でのマナーの向上を促す。	欠席が多い・成績不振等、学生情報は課内で共有している。また、学生情報を得た時は、直ちに関係部署に情報共有している。 アレルギーの学生がいるため、学内での食べ歩き・飲み歩きは特に注意を行っている。	A
③	【学生部との連携】 ・大学生としての自覚ある行動ができるよう、学生部と情報共有を密にする。 ・自治会等、学生の自主的な活動や行事等の支援を行う。	今年度は学外からの苦情電話（迷惑駐車・タバコ等）が非常に多く、学生部と協力し、大学周辺の見回りや掲示物作成、ポータルサイトでのお知らせを行っている。 大学祭で学生部・総務課と連携して学生の自主的な活動の支援を行った。	B
④	【トキガクポータル・教学システム】 ・遠隔授業に備え、普段からトキガクポータルを活用するよう学生・教職員に勧める。 ・情報周知のほとんどをトキガクポータルを通じて行っているため、学生に毎日お知らせおよびメールのチェックをするよう促す。 ・統合を見据え、短大と教学システムの統合について検討する。	遠隔授業は行っていないが、欠席時の課題提示等をポートフォリオで行っていることが多いので、教職員・学生ともに使い方の質問は減っている。 短大と教学システムの統合についてはまだ検討できていないが、教学システムをどのように使用しているか等の情報共有を行っている。	B

次年度の課題

課員の入れ替わりがあり、人員もこれまでのように配置されなくなる予定で、仕事の簡略化等見直しが必要である。関係部署と連携を取り、検討を進めたい。

ポートフォリオについて、教員からの返信を見落とす、教員からの返信がない等のトラブルが多々あったので、ポートフォリオについての注意点をまとめて周知したい。

15. 会計課

令和４年度の目標			
会計システムの有効活用など業務軽減のための改善策を見出す。			
	具体的な取り組み	進捗状況	評価
①	【業務見直し・合理化】 ・予算執行状況を毎月、担当課に提供することで、各課の予算管理の負担を軽減する。	予算執行状況を担当課に提供することで、毎日の各課の予算管理を効率化するだけでなく、各課の補正、当初予算の作成においても実績把握が容易になり、予算作成の負担軽減とともに予算精度を向上させることができた。	A
②	【事務手続】 ・トキガクポータルを活用し、学費や各種費用の納入期間、および書類提出期日の周知徹底を図る。	トキガクポータルを通じ、各種手続期間を周知するとともに、教学課との連携により、手続きの遅れがないよう周知したことで、スムーズに処理をすることができた。	B
③			
④			
次年度の課題			
経費申請および清算業務の効率化のために、「経費精算システム」の導入および運用を目指す。			

16. 図書館運営委員会

令和４年度の目標			
・特色ある図書館を目指す。 ・利用者サービスの充実を図る。			
	具体的な取り組み	進捗状況	評価
①	【特色ある図書館】 ・教育系の大学、短大なので、絵本・児童書等、こども教育関連図書の充実・整備を図る。 ・実習関連図書を充実させる。	・絵本・児童書・実習関連図書は計画的に購入し、充実させた。 ・古くなり痛んでいる本は、除却、売却を行った結果、本の配架スペースもとれるようになった。 ・机の配置をかえ、落ち着いた学習スペースも設置した。	A
②	【主催行事】 ・昨年度までは、コロナ禍により、実施していなかったが、去年度教員の選書ツアーを実施することが出来た。今年度は感染症の状況をみながら、学生の選書ツアー、読み聞かせコンテストを再開させたい。	・教職員の選書ツアーは、8 名が参加いただいた。 ・学生の選書ツアー、読み聞かせコンテストは、安全を考慮し実施したが、参加人数が少なく残念だった。	B
③	【利用サービス】 ・対面授業が始まったので、教職員、学生の利用が以前のように増加すると予想される。教職員や学生の動向をみながら整備を行う。 ・図書館にある「聞蔵」や「ジャパンナレッジ」などの活用方法を学生に知らせ、卒論や保育実践演習などに活用方法を周知する。	・対面授業が始まり、教職員や学生の利用が以前のように戻ってきた。授業での図書館活用も増えてきている。 ・検索サイト「聞蔵」や「ジャパンナレッジ」を利用していたが、周知をしても利用状況が低いので来年度は中止にする。	A
次年度の課題 図書館の行事がコロナ禍で 3 年間、出来なかったため、学生に馴染みがなく、参加者は少なかったが、企画を工夫して取り組んでいきたい。			

17. 入試広報課

令和４年度の目標 募集定員確保（総合型で 80 名、学校推薦型で 40 名をめざす）と入試の円滑実施			
	具体的な取り組み	進捗状況	評価
①	【広報活動】・保有名簿への効果的なアプローチ ・SNS に動画広告を検討 ・Instagram の活用 ・在学生の協力を得て高校生に情報発信	・5 月大学案内・入試ガイド、6 月学生募集要項を一斉発送。 ・SNS 広告に 15 秒のショート動画を 2 本配信。 ・Instagram を定期的に更新。	B
②	【ＯＣ】 ・ＯＣチラシ(ＤＭ)送付、動員増を図る ・ＯＣ体験授業の事前告知 ・大阪南部の駅広告や外周フェンスへの案内効果的なポスター制作	・6 月 OC チラシからメッセージを『いくぞ！トキガク！』の指さしポーズ写真を使用、OC 開催の 2 週間前にはチラシを送付し、動員数 UP を図った。延べ人数昨年 366 人⇒460 人 ・今年度より高校宛てに OC チラシを 5 枚送付、進路指導部前やクラスに掲示を依頼しPR を強化。外周フェンスも継続。	B
③	【学校訪問・進路ガイダンス】 ・主要校を担当教員と入試広報課で継続訪問することによる高校との信頼関係の構築 ・高校ガイダンス及び会場ガイダンスを担当教員と入試広報課で積極的に参加し、高校教員・高校生との接触回数を増加 ・高大連携協定校の増加を図る	・年 3 回（5,9,12 月）のタイミングに併せ目的をもって訪問。7,8 月は OC 参加者の高校に入試広報課で訪問。 ・校内及び会場ガイダンスを教員と課員合わせて 181 件（2 月末時点）参加。 ・公立私立併せて、32 校に高大連携依頼、27 校と協定締結。	A
④	【入試選考】 ・総合型入学金免除を事前申込み制に変更 ・入試に関する免除・支援制度を資料請求者及び高校進路指導部へ告知を工夫 ・学校推薦型（指定校）の高校評定を見直し早期の案内・発送を実施 ・入試実施のための準備、試験実施、成績処理、合否発送などの各業務を点検、改善	・総合型選抜合格者入学免除制度を事前予約制にし、101 名の予約。 ・総合型選抜エントリー81 名、出願 77 名（昨 61 名）、指定校の出願 30 名（昨 25 名）、公募の出願 11 名（昨 11 名） ・指定校評定を 4 月見直し、6 月初旬発送。 ・各制度のチラシを作成し、訪問セットに同封、高校・資料請求者に発送。 ・入試準備を前々日までに完了、前日には確認作業を実施。	B
次年度の課題 資料請求者へのアプローチ方法と OC の内容を工夫し、年内に募集定員確保をめざす			

Ⅱ　教員の研究分野・内容・実績

「教員の研究分野・内容・実績」について

この章では本学の全専任教員の研究分野、研究内容を紹介し、本年度の教育研究活動の実績を教員ごとに表にまとめている。

本学 HP においても、本学の情報公開の形に合わせ、全専任教員の学位を記載している。

また、教育活動については、授業担当教科に合わせて、その他の活動として本学の教育センターの公開講座などについても記載しているが、今年度はコロナ感染防止の観点から中止しているものもある。なお、記載した授業担当教科以外にも、1 回生・2 回生のいずれかの担当となり、基礎学力の向上や論文執筆の基礎、キャリア教育などを行う「基礎演習Ⅰ」「基礎演習Ⅱ」という授業も行っている。更に 3 回生、4 回生の担当となり卒業論文執筆の指導に当たる「専門演習Ⅰ」「専門演習Ⅱ」の担当もしている。

研究活動については、専攻分野、所属学会、研究課題と研究キーワード等を記載し、その教員の研究分野が分かるようになっている。また、本年度の研究業績については、本年度に行ったものから代表的な研究活動のみを記載している。更に、教育活動と研究活動以外に社会に貢献するような活動を行っている教員はそれも記載している。

職名	教授	氏名	Ａｌｅｘ．Ｍ．林	学位	修士（文化学）
校務分掌	研究部(授業研究)、学生支援(海外研修)、入試問題作成委員、地域貢献				

教育活動

担当授業科目	英語スピーチプレゼンテーション、リスニング・フォー・コミュニケーション、 英語学演習、欧米の子ども文化、ベーシック・イングリッシュ・カンヴァセーション、 幼児英語教材研究、幼児英語実践論、中学英語、中学教科教育法（英語）Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ
その他の活動	地域密着型情報発信　FM 放送 DJ パーソナリティ平野区学力サポート事業（小学生・中学生のための英語スピーチコンテスト）監修大阪市英語授業サポート、全日本大学生英語スピーチコンテスト審査委員 高校生・中学生英語プレゼンテーション指導研修委員、常磐会学園大学公開講座

研究活動

専攻分野	日米文化比較（言語・文化） バイリンガル教育 プレゼンテーション（言語）
所属学会	大学英語教育学会、国際ビジネスコミュニケーション学会、日本英語授業研究学会
研究課題	英語プレゼンテーション、英語ティーチング・メソッド、英語教材
研究キーワード	プレゼンテーション、バイリンガリズム、キッズイングリッシュ、クロスカルチャー
著書	

書名	単/共	発行年月	発行所
中学英語リスニングテスト	単	令和 4 年 9 月	全日本模試
中学英語「主体的・対話的で深い学び×CLIL×ICT×UDL」	共	令和 4 年 11 月	大学教育出版
論文			
タイトル　単/共			
発表等			
タイトル　単/共			
第 51 回　天野杯　全日本大学生英語弁論大会	共	令和 4 年 10 月	獨協大学　草加キャンパス
第 7 回　平野区子供英語スピーチコンテスト	共	令和 4 年 11 月	大阪市平野区役所
第 71 回　全日本高校生英語弁論チャーチル杯	共	令和 4 年 11 月	関西学院大学
第 71 回 高崎市長杯英語弁論大会	共	令和 4 年 11 月	高崎経済大学
第 19 回　津田梅子杯争奪学生英語弁論大会	共	令和 4 年 12 月	津田塾大学　小平キャンパス

社会貢献活動等

活動内容等	・全日本社会人・大学生英語弁論大会審査委員長 ・全日本高校生英語弁論大会審査委員長 ・大阪市平野区子ども英語スピーチコンテスト監修・審査委員長 ・高校生・中学生英語プレゼンテーション指導研修講師 ・大学英語教育学会(元社員)・大学英語教育学会（学術論文審査・査読委員） ・地域密着型情報発信　FM 放送 DJ パーソナリティ、常磐会学園大学公開講座

職名	講師	氏名	井上　敏孝　（イノウエ　トシタカ）	学位	博士　（学校教育学）
校務分掌	入試部　新しい学習プログラム検討委員会　人権教育推進委員会　１年次指導				

教育活動

担当授業科目	社会 社会科教育法 日本国憲法 交流教育の指導 生涯学習論 総合演習教職Ⅱ 介護等体験実習
その他の活動	兵庫教育大学　非常勤講師

研究活動

専攻分野	日本史・アジア史・教科教育学関連
所属学会	台湾史研究会・社会系教科教育学会・日本社会科教育学会・日本家政学会・日本技術史教育学会・日本インターンシップ学会・日本教育情報学会・日本産業技術史学会・史訪会　等
研究課題	歴史学の視点を組み込んだ社会科教材開発及び授業構想力の育成
研究キーワード	台湾史　社会科教育　教科教育学　人材育成　土木史

論文

タイトル	単/共	発行年月	発表雑誌等
レンブ(蓮霧)について	単	2022 年 4 月	『農業および園芸』(97)4、pp. 286-289
北千島における港湾開発	単	2022 年 4 月	『常磐会学園大学研究紀要』(22)、pp. 3-19
壺蘆島における近代的港湾の建設計画	単	2022 年 5 月	『東洋史訪』(29)、pp. 28-43
日本統治時代台湾におけるシロアリ対策に関する一考察	単	2022 年 7 月	『しろあり』(178)、pp. 7-13
戦前の台湾・太平山において林産物輸送に使われた架空索道	単	2022 年 8 月	『森林技術』(964)、pp. 24-27
戦前の 3 大博覧会で建設された暹羅館	単	2022 年 9 月	『タイ国情報』(56)5、pp. 90-99
戦前のタイと台湾との国際航空路の開設に関する一考察	単	2022 年 11 月	『タイ国情報』(56)6、pp. 83-92
満州に運ばれた台湾産青果物	単	2022 年 11 月	『果実日本』(77)12、pp. 66-69
ラサ島(沖大東島)での鉄筋コンクリート突堤の建設	単	2022 年 12 月	『海事交通研究』(71)、pp. 27-38
台湾に持ち込まれた盤谷文旦とその後の歴史	単	2023 年 1 月	『タイ国情報』(57)1、pp. 75-81
非対面型授業における授業構想力の育成	単	2023 年 2 月	『兵庫教育大学同窓会教育実践論文集』(4)、pp. 4-10
台湾農産物の輸送試験に関する一考察	単	2023 年 3 月	『農業および園芸』(98)3、pp. 217-221

発表等

タイトル	単/共	発表年月	発表学会等
福昌公司による青島港築港工事と同港拡張計画	単	2022 年 7 月	史訪会第 29 回学術討論会
小学校社会科デジタル教科書を活用した授業開発に関する批判的考察	単	2022 年 10 月	日本社会科教育学会第 72 回全国研究大会　オンライン開催
戦前の台湾で活躍した南進丸について	単	2023 年 3 月（予定）	日本技術史教育学会関西支部 2022 年度研究発表講演会

社会貢献活動等

活動内容等	史訪会副会長兼編集委員長・日本技術史教育学会関西支部　幹事(企画)・近鉄文化サロン講師・アジア探訪研究所　研究所員・令和 4 年兵庫教育大学大学院同窓会総会第 41 回全国大会教育実践研究論文(奨励賞)・第 20 回日本台湾学会関西部会研究大会評論・常磐会学園「新たな学び」・常磐会学園大学社会教育センター公開講座講師

職名	教授	氏名	植原　和彦（ウエハラ　カズヒコ）	学位	学士（経済学）
校務分掌	図書館長				

教育活動

担当授業科目	「学校経営と学校図書館」「学習指導と学校図書館」「学校図書館のメディアの構成」「教育原理」
その他の活動	岸和田市教育委員会教育長職務代理　　岸和田市公園緑化協会監事

研究活動

専攻分野	学校図書館　就学前教育、生涯学習
所属学会	学校図書館学会　関西教育学会
研究課題	幼稚園、小学校、中学校の連続性について、学校図書館の活用と主体的で対話的で深び
研究キーワード	学校図書館　　主体的な学び　　幼小連携
著書	

書名	単/共	発行年月	発行所
教員採用試験・公務員一般教養　SPI、専門教養過去問題	共	令和４年４月	大阪教育図書
福祉小六法	共	令和４年４月	株式会社みらい社
幼稚園・幼保認定型こども園教員採用試験問題 200 選」	共	令和４年４月	大阪教育図書 幼稚園採用試験検討委員会
「保育士資格・採用試験問題 200 選」	共	令和４年４月	大阪教育図書　保育問題検討委員会
役立つ保育・教育用語集	共	令和４年４月	大阪教育図書

論文			
タイトル	単/共	発行年月	発表雑誌等

発表等			
タイトル	単/共	発表年月	発表学会等

社会貢献活動等

活動内容等	岸和田市教育委員会教育長職務代理 岸和田市教育委員会教育委員 岸和田市公園緑化協会監事 大阪健康保育評価委員 大阪調理師専門学校評価委員 すこやか認定こども園第三者評価委員

職名	講師	氏名	大隅　敏明（オオスミ　トシアキ）	学位	修士（情報学）
校務分掌	教務部　ハラスメント防止対策相談員 ICT 教育推進委員会				

教育活動

担当授業科目	情報基礎演習Ⅰ　情報基礎演習Ⅱ　総合演習教職Ⅰ プレゼンテーション演習　ウェブデザイン演習 ボランティア概論　ボランティア演習
その他の活動	

研究活動

専攻分野	情報教育
所属学会	情報文化学会、教育システム情報学会
研究課題	学校教育におけるプログラミング教育の在り方の考察
研究キーワード	教育のデザイン、科目デザイン、大学教育、支援システム
著書	

書名	単/共	発行年月	発行所

論文	

タイトル	単/共	発行年月	発表雑誌等

発表等	

タイトル	単/共	発表年月	発表学会等

社会貢献活動等

活動内容等	

職名	教授	氏名	岡（宮薗）美佳	学位	博士（文学）
校務分掌	研究部、図書館運営委員会、教養教育検討委員会、リメデイアル教育検討委員会、２年次指導				

教育活動

担当授業科目	国語科教育法（書写を含む）、小学国語（書写を含む）、コミュニケーション基礎、言語表現法、読書と豊かな人間性、児童文学研究、基礎演習Ⅰ、専門演習Ⅰ・Ⅱ、保育実践演習Ⅱ（分担）
その他の活動	新たな学びオンライン受講コンテンツ「「おおきなかぶ」を視点とした幼児期から学童期以降への学びの接続」（幼稚園・小学校両教諭受講可能）を担当 常磐会学園教育センター　公開講座「夏目漱石の子ども観－『道草』を手がかりに―」を担当

研究活動

専攻分野	日本近代文学・国語教育
所属学会	日本近代文学会、日本近代文学会関西支部、日本文芸学会、阪神近代文学会、日本キリスト教文学会、日本キリスト教文学会関西支部、日本国語教育学会、日本保育者養成教育学会
研究課題	近代文学における教師像、近代文学におけるキリスト教の表象
研究キーワード	近代文学、夏目漱石、文化表象

著書

書名	単/共	発行年月	発行所

論文

タイトル	単/共	発行年月	発表雑誌等
「三浦綾子『泥流地帯』『続泥流地帯』考―「学び」と結びついたキリスト教の表象をめぐって―」	単	2022 年 11 月	「キリスト教文藝」第三十八輯
「児童文化財としての教材作りから乳幼児の学びを考える――エプロンシアターと絵本作りを通して――」	共	2023 年 3 月	「常磐会学園大学研究紀要」第 23 号

発表等

タイトル	単/共	発表年月	発表学会等
三浦綾子『泥流地帯』『続泥流地帯』考 ――「学び」と結びついたキリスト教の表象をめぐって――	単	2022 年 7 月	日本キリスト教文学会関西支部 2022 年度夏季大会（web 開催）
児童文化財の活用と継承に向けた取り組み―エプロンシアターとしかけ絵本作りを通して―	共	2023 年 3 月	日本保育者養成教育学会第 7 回研究大会（web 開催　主催校：文教学院大学）

社会貢献活動等

活動内容等	阪神近代文学会会長、日本キリスト教文学会関西支部運営委員、日本文芸学会常任理事、近代部会世話役 2022 年度　社会福祉法人　清和会　幼保連携型こども園清和こども園評議員

職名	准教授	氏名	笠川　武史（カサガワ　タケシ）	学位	修士（芸術学）
校務分掌	運営部会、学生部長、将来計画検討委員会、大学評価委員会、ＦＤ委員会、ハラスメント防止対策委員会、学生相談室、カウンセリングケア、保健センター運営委員会、				

教育活動

担当授業科目	図画工作科教育法、総合演習教職Ⅱ、教育実習事前・事後指導、保育表現指導、幼児と造形表現、絵本の指導、保育内容(表現Ⅱ)、教職実践演習
その他の活動	

研究活動

専攻分野	芸術学(日本画) 図画工作,造形表現
所属学会	社団法人 日展(第１科日本画) 会友、新日春展 会友、京都日本画家協会会員、 日本画研究団体「東丘社」会員 全国大学造形美術教育教員養成協議会、全国保育士養成協議会、日本保育者養成教育学会
研究課題	日本画、保育・教職の現場で活用できる造形表現力と指導力の向上
研究キーワード	日本画、岩絵の具、技法、表現、感性
著書	

書名	単/共	発行年月	発行所
なし			

論文

タイトル	単/共	発行年月	発表雑誌等
「保育表現指導科目」における動画作成を用いた授業展開についてⅡ	共	令和５年３月	研究紀要 第23号 常磐会学園大学
学生アンケートを通した幼児期の表現活動についての意識調査	共	令和５年３月	研究紀要 第23号 常磐会学園大学

発表等

タイトル	単/共	発表年月	発表学会等
第６回 新日春展　入選	単	令和４年 ４月	新日春会
第９回 日展(第１科 日本画)　無鑑査	単	令和４年10月	社団法人 日展
保育表現指導科目におけるリモートを活用した授業展開について	共	令和５年３月	日本保育者養成教育学会第７回研究大会
学生アンケートを通した幼児期の表現活動についての意識調査	共	令和５年３月	日本保育者養成教育学会第７回研究大会

社会貢献活動等

活動内容等	・泉佐野市民展 日本画・洋画・平面作品の部　審査員

職名	教授	氏名	加藤　達雄（カトウ　タツオ）	学位	修士（教育学）
校務分掌	教務部、自己評価委員会、ICT 教育推進委員会、将来構想検討会議、大学評価委員会、教務連絡協議会、新たな学修プログラム検討委員会、地域貢献プロジェクト、学生募集、実習指導室、両学長室会議				

教育活動

担当授業科目	体育科教育法、保育内容（健康）、ウェルネスの科学、保育表現指導、総合演習教職Ⅰ
その他の活動	公開講座「キッス運送教室」「シニア運動教室」 大阪府立阿倍野高校出前授業「レクレーション、運動あそび」

研究活動

専攻分野	健康・スポーツ科学
所属学会	日本体育学会、日本体力医学会、日本バイオメカニクス学会、日本ウォーキング学会、保育者養成教育学会、日本トレーニング学会
研究課題	運動あそびの習熟、幼児・児童・青年の体力・健康観、性教育
研究キーワード	運動学、バイオメカニクス、健康
著書	

書名	単/共	発行年月	発行所
なし			

論文

タイトル	単/共	発行年月	発表雑誌等
「保育表現指導」科目における動画作成を用いた授業展開について（2）	共	令和５年３月	常磐会学園大学紀要 23 号
学生アンケートを通した幼児期の表現活動についての意識調査	共	令和５年３月	常磐会学園大学紀要 23 号
幼児の立ち幅跳びにおける跳躍距離の調整と向上との関連　―下肢および体幹の動作に着目して―	共	令和５年３月	太成学院大学紀要 25 巻

発表等

タイトル	単/共	発表年月	発表学会等
「保育表現指導」科目における動画作成を用いた授業展開について（2）	共	令和５年３月	保育者養成教育学会第７回研究大会
学生アンケートを通した幼児期の表現活動についての意識調査	共	令和５年３月	保育者養成教育学会第７回研究大会

社会貢献活動等

活動内容等	・常磐会学園教育センター公開講座講師「キッス運送教室」「シニア運動教室」 ・大阪市平野区健康まつり実行委員会委員 ・香芝市まちづくり提案活動支援事業審査委員・副会長 ・香芝市子ども・子育て会議委員・会長 ・平野区公募型プロポーザル選定委員「令和５年度 長吉六反地域等の未利用地を活用したまちづくり基本構想案の作成及び実現方策等検討業務委託にかかる事業者の選定」

職名	准教授	氏名	坂口　静子(サカグチ　シズコ)	学位	学士　(教育学)
校務分掌	進路・実習指導部部長　　実習指導室運営　　こどもセンター運営委員会 常磐会学園乳幼児研究部会				

教育活動

担当授業科目	幼児教育課程論、保育方法論、保育実習指導Ⅱ、保育実習Ⅱ、総合演習保育Ⅰ・Ⅱ 保育実践演習、教育実習、幼稚園教育実習事前事後指導
その他の活動	実習指導室業務　　教育保育実習の手引き・実習日誌作成業務　　こどもセンター運営委員 乳幼児教育研究会運営委員　　進路・実習指導部

研究活動

専攻分野	子ども学（子ども環境学）
所属学会	日本心理学会　　日本保育学会　　日本保育者養成教育学会
研究課題	認定子ども園が本格化する現状の中、よりよい保育者としての質とはどうあるべきかを研究する。
研究キーワード	保幼小連携　　地域連携　　預かり保育　　子育て支援
著書	

書名	単/共	発行年月	発行所
論文			
児童文化財としての教材づくりから 乳幼児の学びを考える ～エプロンシアターと絵本作りを通して～	共	2023 年 3 月	常磐会学園大学研究紀要第 23 号
発表等			
児童文化財の活用と継承に向けた取り組み ～エプロンシアターと仕掛け絵本作りを通して～	共	2023 年 3 月 5 日	日本保育者養成教育学会第 7 回研究大会

社会貢献活動等

活動内容等	・こども青少年局保育・幼児教育センター主催　就学前研究会講演会講師 ・大阪市立豊里第二保育所　園内研修会講師（定期）

職名	教授	氏名	佐谷　力（サタニ　ツトム）	学位	経済学士
校務分掌	運営部会　研究部長　ＦＤ委員会　学生相談室　大学評価委員会　将来構想検討委員会				

教育活動

担当授業科目	私たちと人権　学校教育相談　生徒・進路指導論　カウンセリング実務演習Ⅰ
その他の活動	

研究活動

専攻分野	教育学
所属学会	日本学校教育相談学会
研究課題	カウンセリングの考え方を生かした教育実践
研究キーワード	カウンセリング　信頼関係づくり　教育相談　生徒指導　人権
著書	

書名	単/共	発行年月	発行所

論文	

タイトル	単/共	発行年月	発表雑誌等

発表等	

タイトル	単/共	発表年月	発表学会等

社会貢献活動等

活動内容等	＜令和４年度 講演会・研修会講師＞ ・大阪府教員 小学校・中学校・支援学校 各 10 年経験者研修 ・大阪府高等学校教員インターメディエイト研修 ・大阪府教員 小学校・中学校・高等学校・支援学校　各初任者研修 ・広島市教員 学校教育相談研修 ・寝屋川市教員 初任者研修・10 年目研修 ・枚方市教員 ３年目研修 ・堺市教員 学校教育相談研修 ・東大阪市教員 初任者研修 ・泉北地区保護司会「社会を明るくするつどい」講演会 ・大阪府立堺東高校教職員研修会 ・大阪府立三島高校教職員研修会 ・大阪府立港高校ＰＴＡ講演会

職名	教授	氏名	荘司　泰弘（ショウジ　ヤスヒロ）	学位	博士（教育学）
校務分掌	進路・実習指導部、リメディアル教育検討委員会、こどもセンター運営委員会、乳幼児教育研究会、学生募集、実習指導室、2 年次指導				

教育活動

担当授業科目	幼児と言葉、総合演習教職Ⅰ、保育内容総論、保育内容（環境）、保育者論、保育内容（人間関係）
その他の活動	日本自然保育学会会長、日本ペスタロッチー・フレーベル学会理事、日本乳幼児教育学会論文査読委員、

研究活動

専攻分野	幼児教育
所属学会	日本ペスタロッチー・フレーベル学会、日本自然保育学会、日本乳幼児教育学学会
研究課題	フレーベルの教育遊具
研究キーワード	フレーベル、教育遊具、こども園、自然保育
著書	フレーベル教育遊具の研究

書名	単/共	発行年月	発行所

論文	

タイトル	単/共	発行年月	発表雑誌等

発表等	

タイトル	単/共	発表年月	発表学会等

社会貢献活動等

活動内容等	

職名	専任講師	氏名	白川　晴美（シラカワ　ハルミ）	学位	修士　（教育学）
学務分掌	学生部　２年次指導　常磐会学園乳幼児研究部会				

教育活動

担当授業科目	保育者論　保育実習指導Ⅱ　保育実習Ⅱ　総合演習保育Ⅰ　保育実践演習　保育の計画と評価　幼児と言葉　総合演習教職Ⅰ、Ⅱ　幼児と人間関係　教職実践演習
その他の活動	日本メディカル福祉専門学校　非常勤講師

研究活動

専攻分野	幼児教育・社会福祉
所属学会	日本保育学会　　日本保育者養成教育学会　日本自然保育学会　日本乳幼児保育者学会
研究課題	異年齢保育、子どもを尊重する為の環境や人間関係についての研究
研究キーワード	子どもの権利　子どもの最善の利益　異年齢保育　多様性
著書	

書名	単/共	発行年月	発行所

論文			

発表等			

社会貢献活動等

活動内容等	

職名	専任講師	氏名	中村　哲也　（ナカムラ　テツヤ）	学位	教職修士　（教育学）
学務分掌	教務部　学生相談室　高大接続検討委員会　リメディアル教育検討委員会　教職教育研究センター				

教育活動

担当授業科目	こども学　地域学習論　総合演習教職　教育制度論　教育史　　ボランティア実習　生活科教育法　教職実践演習
その他の活動	

研究活動

専攻分野	教育学　教育方法学
所属学会	日本生活科・総合的学習教育学会　日本教育方法学会　日本学校心理士会　日本教育カウンセリング学会　日本ピア・サポート学会　日本協同教育学会
研究課題	小集団を活用した協同的・対話的な学習活動の実践方法
研究キーワード	生活科・総合的な学習の時間　協同学習　グループ・ワーク　アクティブ・ラーニング

著書

書名	単/共	発行年月	発行所

論文

タイトル	単/共	発行年月	発表雑誌等
グループダイナミクスの視点での集団意思決定の傾向と課題―グループ活動における指導法の提案―	単	2022/4	研究紀要 第 22 号 常磐会学園大学
「気になる子」を含んだ学級における関係づくり―グループ活動を行うことで子どもの相互関係が深まるか―	単	2022/4	研究紀要 第 22 号 常磐会学園大学

発表等

タイトル	単/共	発表年月	発表学会等
「自由進度学習」の実践上の課題と可能性について ―3 つの授業実践及び中学校でのアンケート結果からの考察―	単	2022/10	日本協同教育学会　第 18 回大会

社会貢献活動等

活動内容等	・平野みんな食堂パイオニア　スーパーバイザー ・平野みんな食堂事業参加 ・岸和田市生涯学習審議会委員 ・きょうどう・探究型授業づくり研究会主催 ・令和４年度大東市教育改善会議出席 ・授業改善研修指導助言　大東市立（住道中学　北条中学　深野中学）四条畷市立田原中学

職名	准教授	氏名	昇　慶一（ノボリ　ケイイチ）	学位	学士　（法律学）
学務分掌	学長補佐　入試部長　運営部会　自己評価委員会　ＩＣＴ教育推進委員会 将来構想検討会議　高大連携推進委員会　実習指導室				

教育活動

担当授業科目	子育て支援　社会的養護Ⅰ　社会的養護Ⅱ　子どもの生活と権利　介護概論 総合演習教職Ⅰ　保育実習指導Ⅲ　保育実習Ⅲ
その他の活動	保育実習（施設）の実習施設調整担当 公立幼稚園教諭・保育士採用試験対策サークル（「たまごサークル」）顧問

研究活動

専攻分野	社会法学（児童福祉分野）
所属学会	子どもアドボカシー学会　日本子ども虐待防止学会　児童福祉法研究会　児童養護研究会
研究課題	児童福祉現場における子どもの権利保障
研究キーワード	子どもの権利　児童虐待　社会的養護　司法福祉
著書	

書名	単/共	発行年月	発行所

論文			
タイトル	単/共	発行年月	発表雑誌等
イギリス・スウェーデンの子どもアドボカシー視察報告書	共	令和４年 10 月	子どもアドボカシー学会

発表等			
タイトル	単/共	発表年月	発表学会等
弁護士活動とアドボカシー	単	令和４年７月	子どもアドボカシーセンター科研コア会議
イギリス・スウェーデンにおける子どもアドボカシーの現況	共	令和４年 10 月	子どもアドボカシー学会

社会貢献活動等

活動内容等	子どもアドボカシー学会 理事・子どもアドボケイト養成講座講師 社会福祉法人千里聖愛保育センター 理事、NPO 法人子どもアドボカシーセンターOSAKA 理事 社会福祉法人泉大津市社会福祉協議会 評議員、社会福祉法人月の輪学院 評議員・賞罰委員会委員 苦情解決第三者委員（社会福祉法人和泉乳児院、社会福祉法人永寿福祉会、社会福祉法人泉大津市社会福祉協議会） 各団体・法人研修講師（日本ファミリーホーム協議会東北ブロック研修会、社会福祉法人平安徳義会職員研修会、社会福祉法人社会福祉協議会児童施設部会・大阪府合同人権研修会、社会福祉法人武田塾職員研修会） 令和５年度大阪市平野区における新たな地域コミュニティ支援事業他２事業にかかる業者選定委員

職名	教授	氏名	ビル・ロッケンバッハ	学位	修士（数学）
校務分掌	学生部　　海外研修、学生部				

教育活動

担当授業科目	英語Ⅰ・Ⅱ　　実用英語　　英語学概論　　英語文学講読（閉講） リーデイング・フォー・コミュニケーション 英語コミュニケーション概論　　英語Ⅲ　　基礎演習Ⅰ・Ⅱ（英語授業） 時事英語研究（閉講）　　専門演習Ⅰ 最新英語国事情（閉講）
その他の活動	教科書・受験用の教材の校正と作成 常磐会学園教育センター公開講座（講師）

研究活動

専攻分野	英語教育
所属学会	全国語学教育学会（JALT）　　Computer Society（affiliate of IEEE）
研究課題	英語（発音・語彙・文法）教育で利用できるソフトの研究と開発
研究キーワード	英語教育　発音　語彙　文法
著書	

書名	単/共	発行年月	発行所
CREATIVE English Communication III	共	2023 年 1 月 11 日←検定合格	第一学習社

論文	

タイトル	単/共	発行年月	発表雑誌等

発表等	

タイトル	単/共	発表年月	発表学会等

社会貢献活動等

活動内容等	・

職名	教授	氏名	丸井　理恵（マルイ　リエ）	学位	修士（教育学）
校務分掌	入試部　高大接続検討委員会、教職教育研究センター、進路支援センター運営委員会 地域貢献プロジェクト				

教育活動

担当授業科目	音楽表現（器楽合奏）、音楽科教育法、保育表現指導、総合演習教職Ⅰ・Ⅱ 音楽演習ⅠA・ⅠB、ⅡA・ⅡB、ⅢA・ⅢB、ⅣA・ⅣB
その他の活動	音楽基礎レッスン、入学前ピアノ指導

研究活動

専攻分野	音楽（器楽）
所属学会	全国大学音楽教育学会、日本保育者養成教育学会、日本保育学会、JPTA（日本ピアノ教育連盟）
研究課題	保育・教職の現場で活用できるピアノテクニックの指導法と教材開発
研究キーワード	音楽表現、ピアノテクニック、タッチタイピング奏法、伴奏法、ML（ミュージック・ラボラトリ）システム
著書	

書名	単/共	発行年月	発行所

論文			
タイトル	単/共	発行年月	発表雑誌等
遠隔・対面指導の機能的な併用から見るこれからの音楽指導	単	令和５年３月	常磐会学園大学研究紀要　第 23 号
「保育表現指導」科目における動画作成を用いた授業展開についてⅡ	共	令和５年３月	常磐会学園大学研究紀要　第 23 号
「学生アンケートを通した幼児期の表現活動についての意識調査」	共	令和５年３月	常磐会学園大学研究紀要　第 23 号

発表等			
タイトル	単/共	発表年月	発表学会等
学生アンケートを通した幼児期の表現活動についての意識調査	共	令和５年３月	保育者養成教育学会第７回研究大会
保育表現指導」科目における動画作成を用いた授業展開について（2）	共	令和５年３月	保育者養成教育学会第７回研究大会

社会貢献活動等

活動内容等	・全国大学音楽教育学会関西地区学会副会長 ・大阪府立夕陽丘高校同窓会「清香会」役員 ・大阪府立夕陽丘高校音楽科後援会「紫陽会」役員

職名	教授	氏名	山崎　徳子（ヤマサキノリコ）	学位	博士（人間・環境学）
校務分掌	学生部、学生相談室、人権教育推進委員会、カウンセリングケア、実習指導室、こどもセンター、				

教育活動

担当授業科目	保育の心理学、子どもの理解と援助、特別支援教育論、子ども家庭支援の心理学、 保育実習指導Ⅰ、保育実習Ⅰ
その他の活動	ボランティアサークル、　自治会担当

研究活動

専攻分野	発達心理学、保育学
所属学会	発達心理学会、保育学会
研究課題	子どもの自己の形成、発達障害がある子どもの自己の形成、　発達相談を通した子育て支援
研究キーワード	自閉症　自己の形成　関係発達　間主観性　発達障害
著書	

書名	単/共	発行年月	発行所
保育現場における特別支援	共著	令和５・２	教育情報出版

論文	

タイトル	単/共	発行年月	発表雑誌等

発表等	

タイトル	単/共	発表年月	発表学会等
自閉症のある子どもの子育てに「家族の流儀」は どのように影響するのか(9)	共同	令和５・３	ラウンドテーブル　話題提供 日本発達心理学会

社会貢献活動等

活動内容等	通年 堺市　早期支援員派遣事業 常磐会短期大学付属いずみがおか園　キンダ―カウンセリング 和歌山県橋本市図書館協議会委員 NPO 法人アサヒキャンプ　理事 大阪市　みんな食堂ネットワーク 講師 NPO 法人アサヒキャンプ　発達障害についての研修会　（令和５・3）

職名	准教授	氏名	山田 義則　（ ヤマダ ヨシノリ ）	学位	修士（教育学）
校務分掌	進路実習指導部				

教育活動

担当授業科目	特別支援教育論　保育実習指導Ⅰ　保育実習Ⅰ　　保育実習Ⅲ　保育実習指導Ⅲ 特別支援教育の指導　　障害児保育Ⅰ　教育心理学
その他の活動	

研究活動

専攻分野	特別支援教育　発達心理学
所属学会	日本発達障害学会　日本臨床発達心理士会　日本学校心理士会
研究課題	発達障害および自閉症スペクトラム障害児者の社会適応
研究キーワード	自閉症スペクトラム障害　発達障害　社会スキル　社会適応　行動変容　発達
著書	

書名	単/共	発行年月	発行所

論文			
タイトル	単/共	発行年月	発表雑誌等

発表等			
タイトル	単/共	発表年月	発表学会等

社会貢献活動等

活動内容等	通年 大阪府立住ノ江支援学校 学校運営協議会委員 大阪市立常盤幼稚園 園内委員会アドバイザー 保護者相談会 大阪市立城東幼稚園 園内委員会アドバイザー 大阪市立銅座幼稚園 園内委員会アドバイザー 大阪市立生魂幼稚園 園内委員会アドバイザー 大阪市立桃園幼稚園 園内委員会アドバイザー 大阪市立味原幼稚園 園内委員会アドバイザー 大阪市立菅南幼稚園 園内委員会アドバイザー 大阪市立九条幼稚園 園内委員会アドバイザー 出張講座講師 （対象：大阪府内高校）

職名	教授	氏名	山本　元子（ヤマモト　モトコ）	学位	修士（文学）
校務分掌	入試部　海外研修主担　入試問題作成委員　　人権教育委員				

教育活動

担当授業科目	中学校教科教育法（英語）Ⅱ　　教育実習事前・事後指導（中学）　教育実習（中学） 小学校英語科教育法　小学校英語 異文化間コミュニケーション　英語音声学 コミュニケーション英文法　　英語Ⅳ
その他の活動	常磐会学園・平野区共催　英語講座講師 大阪市教育振興基本計画グローバル事業 指導講師（英語関連）

研究活動

専攻分野	英語教育学、英語学
所属学会	日本教育学会、大学英語教育学会、関西英語教育学会、英語教育総合学会
研究課題	・小学校で英語を指導する教員を対象とした効果的な研修の構築と実践はどうあるべきか ・教員養成系大学における国際理解教育のあり方について ・中学校・高校での英語指導（主に英文法や音声の指導）について
研究キーワード	国際比較（日韓の英語教育）、小学校英語、中学校英語教育、小・中連携、教員研修、国際理解教育

著書

書名	単/共	発行年月	発行所
名詞の単数形・複数形の使い分けの指導について：具体的な指導案を通して - 英語学論説資料第 53 号 -	単	令和 4 年 6 月	論説資料保存会
英語が確実に身につく問題集	共	令和 5 年 3 月	デザインエッグ

論文

タイトル	単/共	発行年月	発表雑誌等
複数形・単数形をどう使い分けるのか ― 英語母語話者の使い分け感覚 ―	単	令和 5 年 3 月	常磐会学園大学　研究紀要 23 号

発表等

タイトル	単/共	発表年月	発表学会等

社会貢献活動等

活動内容等	・英語教育研究団体 ATELAS　事務局長 ・NPO 小学校教員の英語力を伸ばす会 事務局長 ・大学英語教育学会 関西支部海外の外国語教育研究会会員 ・常磐会学園教育センター公開講座講師 ・高校生対象出張講座講師　（対象：大阪府立高校等） ・大阪市学力アップサポート事業 教員対象指導講師

職名	教授	氏名	吉田　健（ヨシダ　ケン）	学位	修士（人間科学）
校務分掌	運営部会　評価担当部長　　ICT 委員会　　ICT 教育推進委員会				

教育活動

担当授業科目	情報メディア論　　情報モラルと情報セキュリティ　　情報社会と倫理 学校 ICT 活用　　保育の ICT 活用　　私たちと文化　　総合演習教職 I
その他の活動	

研究活動

専攻分野	教育工学
所属学会	日本教育工学会、日本科学教育学会
研究課題	学習者の能動的な学習を引き出す学習メディアの活用
研究キーワード	能動的学修、メディア、情報リテラシー
著書	

書名	単/共	発行年月	発行所

論文	

タイトル	単/共	発行年月	発表雑誌等

発表等	

タイトル	単/共	発表年月	発表学会等

社会貢献活動等

活動内容等	・箕面市立北小学校校区青少年を守る会運営委員

Ⅲ　授業評価

１．授業アンケートの概要と結果

本学の自己点検・評価の一環として、教員が自身の教授技術の向上、及び担当する授業の改善に資するために学生による授業評価をアンケート調査で行っている。授業アンケートの対象となっているのは、本学で開講されている全ての授業である。しかし、実習系の授業や複数教員が共同で行っている授業の一部、及び、出席者数 10 名未満のクラスは実施していない。出席者数 10 名未満のクラスで実施しない理由は、人数が少ないと学生の匿名性が保証されず、アンケートの回答に影響する恐れがあるからである。

質問項目はすべての授業で共通となっている（表 1)。

表 1：アンケートの質問項目

質問項目	そう思う 4	やや そう思う 3	あまり そう思わない 2	そう思わない 1
Ａ．あなた自身について				
(1) 毎回の授業に熱心に取り組んだ。	4	3	2	1
(2) 毎回の授業に対して予習・復習を心がけた。	4	3	2	1
(3) 自ら発言や質問をするなど、積極的に授業に参加した。	4	3	2	1
(4) 授業を受講して、新しい知識・技能を得た。	4	3	2	1
(5) 将来に、学習した成果を活かすことが出来る。	4	3	2	1
Ｂ．　この授業について				
(6) 授業は興味や関心のもてる内容だった。	4	3	2	1
(7) 授業の難易度や進行のスピードは適切だった。	4	3	2	1
(8) テキストやプリント、映像資料等、教材の使い方が効果的だった。	4	3	2	1
(9) 教員は授業開始時刻や終了時刻をきちんと守っていた。	4	3	2	1
(10) 教員は意見の発表など学生の参加を促していた。	4	3	2	1
(11) 教員は私語などで授業を妨げる行為に適切に対応していた。	4	3	2	1
(12) 総合的に、満足のいく授業だった。	4	3	2	1

回答の選択肢については尺度を 4 段階（④そう思う③ややそう思う②あまりそう思わない①そう思わない）としている。集計は専門の業者で行い、結果は学生への成績発表後に教員に示される。また、自由記述の項目として、「1. 授業の良かったところ」「2. 改善して欲しいところ」の 2 項目を設定しており、その結果は集約され全て教員に提示される。

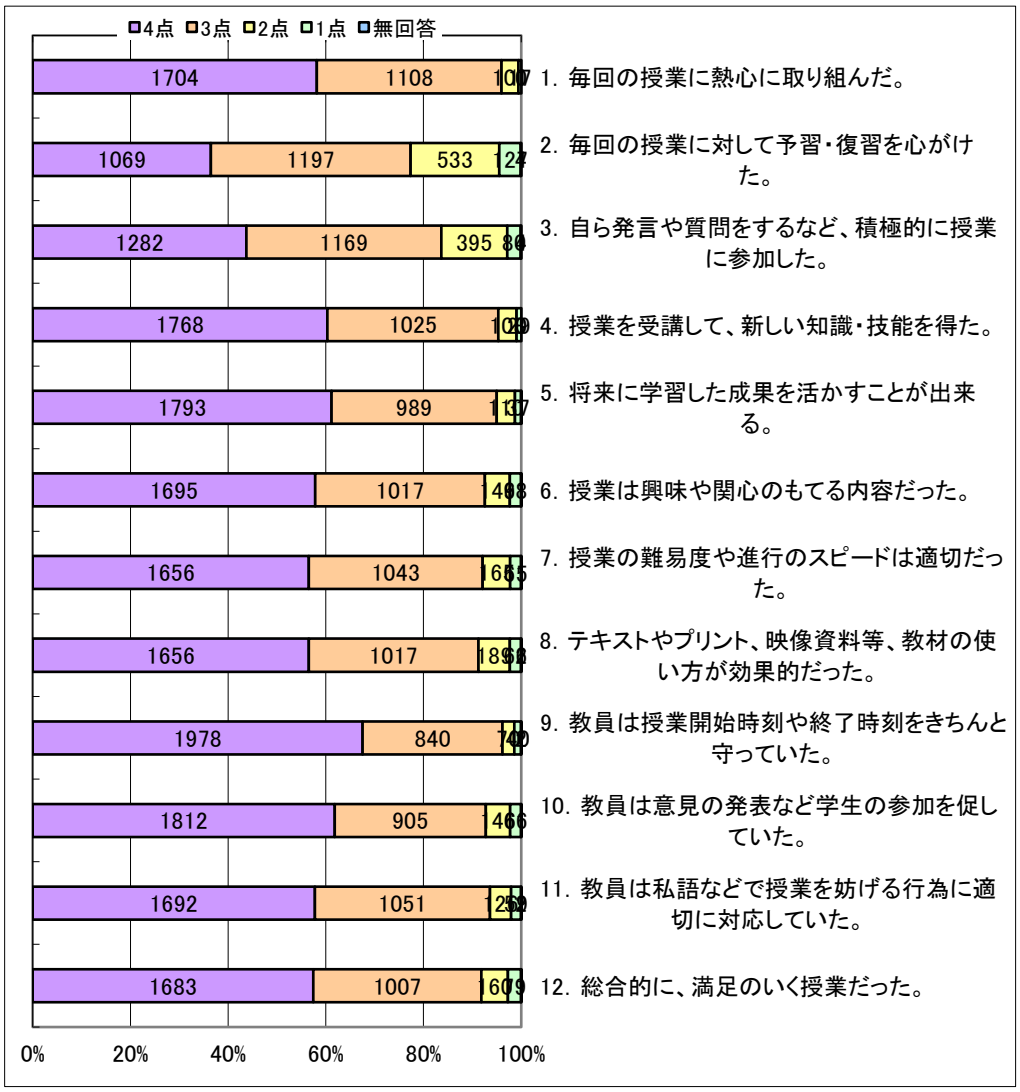
学生への結果の公表は、アンケート結果とともに各教員が授業改善の具体的な方法などをコメントとして掲示する方法を採っている。また、さらにアンケートや授業改善についての意見を研究部で集約している。

今年度の授業アンケートは、春期は 7 月 11 日（月）～25 日（月)、秋期は 1 月 10 日（火）～23 日（月）に実施した。

学生による授業評価アンケート

令和４年度　春期　（のべ人数　２９９０人）

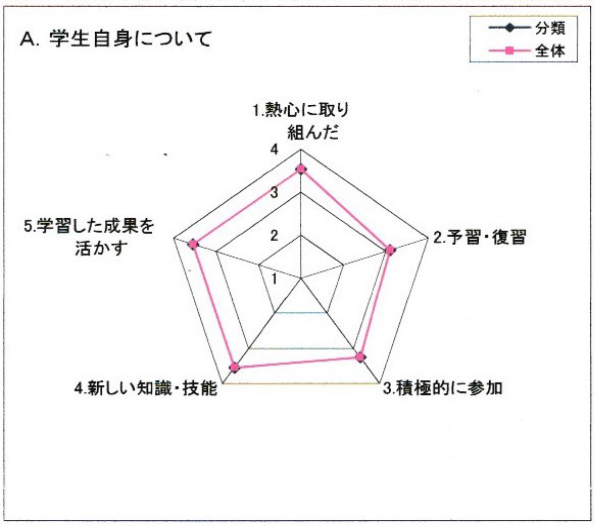
４ そう思う　３ ややそう思う　２ あまり思わない　１ 思わない

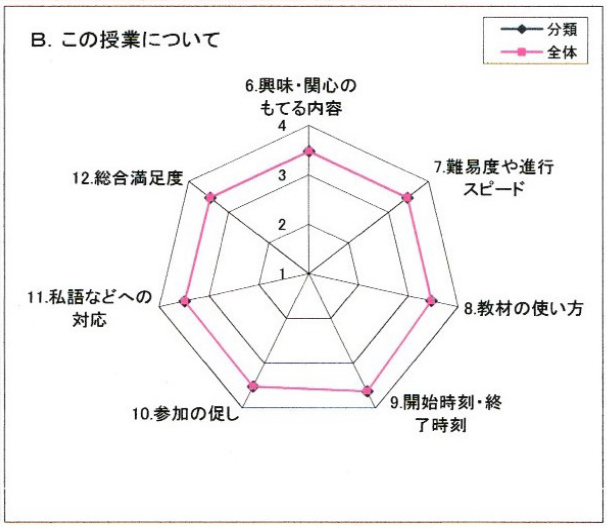


各問の平均

（４点満点）

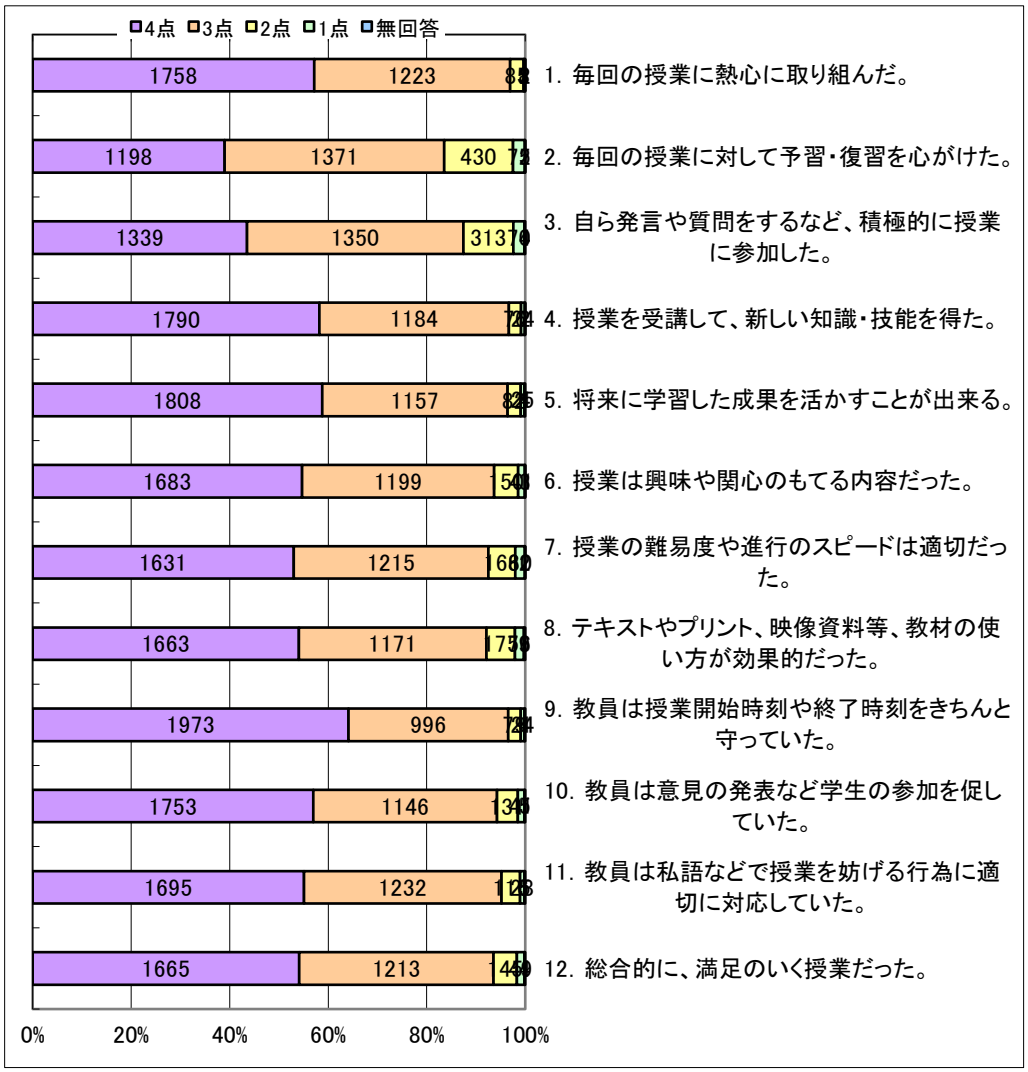
	今年	昨年
1	**3.54**	3.53
2	**3.10**	3.10
3	**3.25**	3.21
4	**3.55**	3.53
5	**3.55**	3.52
6	**3.48**	3.45
7	**3.46**	3.40
8	**3.46**	3.41
9	**3.62**	3.58
10	**3.52**	3.44
11	**3.49**	3.43
12	**3.47**	3.43





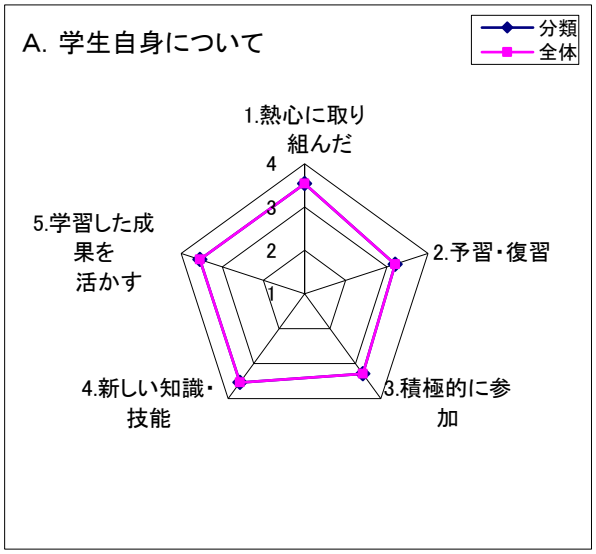
令和４年度　秋期　（のべ人数　３０７６人）

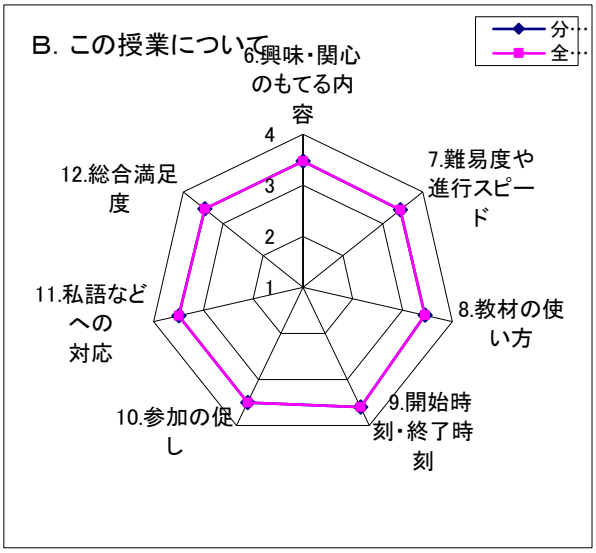
４　そう思う　３　ややそう思う　２　あまり思わない　１　思わない



各問の平均
（４点満点）

	今年	一昨年
1	3.54	3.45
2	3.20	2.94
3	3.29	3.10
4	3.54	3.45
5	3.55	3.44
6	3.47	3.36
7	3.44	3.33
8	3.45	3.32
9	3.60	3.53
10	3.50	3.38
11	3.50	3.39
12	3.46	3.38





２．授業アンケート結果の分析

これまで評価結果が、長い期間継続して前年度を上回っており、評価が向上してきた。教員の授業づくりの努力が反映されているとともに、学生の学ぶ意欲や態度への自己評価も向上している。それが今年度も、継続できている。

春期は、２の項目「２．（学生自身の自己評価）毎回の授業に対して、予習・復習を心がけた」が昨年度と変化がなかった以外、全ての項目で前回より評価が向上している。昨年度も、２の項目と３の項目「３．（学生自身の自己評価）　自ら発言や質問をするなど、積極的に授業に参加した。」が下がった以外の全ての項目で前回より評価が向上していたので、今年度それをさらに上回る評価がされたといえる。そして、２と３以外のすべての項目において「④そう思う」「③ややそう思う」という肯定的な回答が９割を超えている。

中でも、今回一番上昇しているのは「１０．　教員は意見の発表など学生の参加を促していた」である。コロナ感染の影響による「発言や話し合い活動の抑制」が求められる厳しい状況の中において、多くの教員が感染防止に配慮しながら「無理のない範囲での参加体験の取り組み」を工夫して実施する努力があったと推測できる。それが実現できたのには、保健センターを中心にして教職員全体が協力して、消毒のためのグッズや横の学生との距離を空けるための標語の付いた遮蔽物をすべての机に設置するなどの周到な準備や工夫がなされたこと、できるだけ大きな教室を少人数で使うことが実践できていたことも大きく寄与している。次に春期の評価の上昇幅が大きかったのは、「７．授業の難易度や進行のスピードは適切だった」「１１．教員は私語などで授業を妨げる行為に適切に対応していた」の２つの項目である。共に、授業の進め方や学生へのかかわりでの指導や配慮に積極的に取り組み、学習環境の向上を図っている結果と評価できる。

春期の全ての項目の中で一番評価点が高かったのは、「9．教員は授業開始時刻や終了時刻をきちんと守っていた」である。この項目は、毎年一番高い項目であるが、今春も全ての項目の中で一番高い評価を得ている。学習内容と時間を十分に確保するためにも、授業開始時刻や終了時刻の厳守は各教員が意識すれば確実に実行できることであり、今後もぜひ厳格な実施を心掛けていきたい。

もちろん時間だけを確保しても内容が伴わなければ、学習効果は期待できない。しかし、春期で２番目に高い評価を得ているのが「４．授業を受講して、新しい知識・技能を得た」「５．将来に学習した成果を活かすことが出来る」である。これらの項目の高評価からは、「授業をしっかり受講することによって、将来の現場で生かせる知識や技能を身に付けることができる」とほとんどの学生が感じていると言える。特に、本学が中心に据える保育や教育の分野においては、学びを将来に活かすという「実学」の要素が非常に大切だと考えられる。その中で「知識・技能を得た」「将来に生かせる」と、学生が感じる授業内容を提供できているというのは保育士や幼児教育・学校教育の教員を育てる大学として、あるべき教育が実践できていると考えられ、教員の今後の努力のための大きな原動力になる。

学生自身の学習に対する自己評価の５項目のうち、「④そう思う」「③ややそう思う」という肯定的な回答が一番低いのが、「２．毎回の授業に対して予習・復習を心がけた」の項目である。昨春は「0.01」の低下であり今年は横ばいであるが、肯定的な回答が８割程度である。ここには、自主的に意欲的に取り組むことへの学生自身の弱さも見える。しかし、過去７年間の経年変化（８年前から４項目選択・４点満点評価になった。それまでは、「どちらでもない」という項目を含めて５項目選択であり、５点満点評価であった。）を見てみると、ずっと上昇を続けてきたのがこの項目であった。それが、ここ３年上昇が止まったことは残念である。さらに、学習内容の定着と将来に生かせる力を育てることを意識し、次回の学習内容を予告し、積極的に課題を提示することでさらなる家庭学習の充実をはかるなどの努力を続けることを共通理解としたい。

秋期については、昨年度授業アンケートがなかったため一昨年度との比較になる。 昨年度がなかっただけいっそう一昨年度からの上昇幅は大きい。 特に２の項目「（学生自身の自己評価）毎回の授業に対して、予習・復習を心がけた」と３の項目「（学生自身の自己評価） 自ら発言や質問をするなど、積極的に授業に参加した」は一昨年度にその前年を下回っており懸念材料であったが、その分も今回は回復にプラスしてさらに大きな上昇結果となっている。

全体を見て、特に大きく上昇しているのは５、６、７、８の項目である。そして、今回一番上昇しているのは春期と同様に秋期でも「１０． 教員は意見の発表など学生の参加を促していた」である。コロナ感染防止対策でアクティブラーニングの実施が控えられるようになった時期より前と比べても、評価が向上している。そして、参加体験型授業の進め方や形態の幅も広がっていることがうかがえる。

学年で見ると、自己評価や授業への評価は１回生が一番高く、２回生３回生と学年が上がるにつれて評価が厳しくなり、４回生が一番低くなっている。高校での授業との比較する段階（１回生）から、学年が進み本学の授業に慣れていく中で評価の目が肥えて厳しくなっていくのかもしれない。

３．教員のコメントから見える、今後の授業改善について

授業アンケートの評価の対象となった本学専任教員からは、授業アンケートの結果について学生に対してのコメントや授業改善に向けての具体的な方法などが公開されている。

その中から、様々な工夫をしながら「参加体験型の授業づくり」を実践している姿や、それに対する学生の指摘を真摯に受け止めてふりかえっていることのうかがえる多くのコメントの中からいくつかを選び、それぞれの文章の一部を抜粋して以下に掲載しておく。

教科書、パワーポイント、プリント、グループワークをバランスよく入れようと工夫しましたが、さらに魅力のある内容・方法を考えて、より高い満足度を目指したいです。

自由記述で「何が大切かすぐ入ってくる」「ワークシートが分かりやすくて良い」「難しい内容も分かりやすく丁寧な説明で良かった」というコメントをもらっています。分かりやすく伝えることはいつも意識しているので、とても励みになるコメントです。

一方、スライドの青字・赤字について見づらいという指摘を複数いただきました。字の色、部屋の照明をどこまで暗くするかについて改善・工夫を考えます。

グループワークについて上回生の人と一緒になることが多くてコミュニケーションを取りづらかったという声がありました。なるべくそうなるように席を組んでいます。そのほうが多角的な学びがあるからです。しかしどうしてもやりづらいという人の声を受け止める工夫（席替えの回数や希望など）も考えようと思います。

改善点の記述はなく、良かったと思うことの記述が多くみられました。他の時間の受講者数よりも７名少なかったこともあるかもしれませんが、一人当たりの模擬授業の時間にも幅を持たすことができた点、個別の伴奏指導や模擬授業に対するアドバイス・評価にも時間的な余裕があったことが良かったのかと思われます。特に１人でする模擬授業が初めてという２回生にとっては、「初めての模擬授業で分からない事ばかりだったが、先輩の授業を見れてとても勉強になった」等、PPT の使い方を含め参考になった点が多かったようで、是非今後の模擬授業に生かしてもらいたいです。また、「事前に授業の流れがしっ

かり伝えられているので、見通しを持って授業に取り組みやすい」「学生一人一人に寄り添って話を聞いてくれた」「ピアノの指導の時も、指の使い方を分かりやすく教えてくれて、少しピアノに自信を持てた」など、学生が前向きに学習に取り組めたという意見が見られ、とても嬉しかったです。今後も理解度、満足度を得られるような授業工夫をしていきたいと考えています。

このクラスは主に幼稚園・保育所における気になる子どもや障がいのある子どもについての授業で、みなさん方がこれから保育や教育に携わるときに必要な基礎的な知識を身につけてもらう授業です。

ですから、どうしても基礎知識を話することに偏り、話し合いやグループワークが少なくなりました。ここで身につけた知識や考え方は、どの子にも通用するので、これからの授業や実習や演習で考える際に是非とも活かしてもらえたら、と思っています。

また、授業資料は授業で聞き逃した場合や欠席した場合にも利用できるようにすべてポートフォリオに公開しました。ワークという形での課題も、出した出していないということが無いように、ポートフォリオでやり取りしました。ワークには授業で質問できなかったことやしづらかったことを書く欄を設けていたので、質問や疑問に個別に答えることができて良かったと思っています。

授業の指導すべき内容を押さえてうえで、学生が協同的に考え、それをアウトプットすることで深めたり定着したりする授業形態を基本としました。学生からも、『生活の授業はどのようなことをするかや、どうやって授業するか、どのようなポイントを押さえたらよいかなどを深く学べることができた。また、毎回、前回学んだ内容を復習する時間をとっているので記憶に定着しやすいと思った。』や『自分で調べたり、考えたりした上で発表する場があって、先生の解説付きだから 1 番身になる授業』などの評価コメントがあった。

改善点のコメントには「プリントを配ってほしい」というものがあったが、今期はあえて、プリント【ワークシート】は使用しなかった。ワークシートはそれを使って、情報を整理たり、考えをまとめたりするための手段である。しかし、ワークシートを配ることで、ワークシートにまとめること自体が目的化しているように感じる。また、もはや小中学生ではないので、あらかじめ決められた枠【ワークシート】を用いなくても、ノート等に自分の力で内容を適切にまとめてほしいとも考えた。そこでワークシートを使用せず、適宜自分のノート等にまとめていくように指導した。

この授業は、学生自身の健康課題を探求できたら良いかと思っています。もっと身近な問題をと意見がありましたが、どのような事でしょうか？出来るだけ皆さんに関係する題材やタイムリーな題材を挙げようとしていました。また、教えてください。

それと、プリントの文字の大きさ、記述の範囲等の狭さの指摘については、来年度以降出来るだけ修正をしていきます。

この教科の特性から保育士資格希望者必修なのですが、直接、子どもに関係する内容でなく、教養として学生が生涯教育の中で必要な知識を身につけ、実践を目的にしているので、このことを理解して授業を受けて頂きたい。

来年度に向けて、ご意見を真摯に受け止め、改善していきます。

久しぶりに全回対面で実施できたのが良かったです。評価も概ね良好で、特に項目「毎回熱心に取り組んだ」、「受講して新しい知識・技術を得た」、「将来に学習した成果を活かすことが出来る」では全ての学生の皆さんが“そう思う”以上でしたので嬉しく思います。まとめレポートやアンケートの記述では、“制作時間もしっかりとってもらって、将来先生になった時のレパートリーが増えた。”、“造形活動での子どもへの対応について考えながら学ぶことができた。”といった感想が見られ、年々私の意図する成果は上がっています。制作では、同じテーマでも私自身が楽しく興味を持てる工夫を今以上にしていきたいと思います。また、コロナ禍での工夫点も活かしながら、お互いの刺激となるよう工夫していきます。

1 回生から 4 回生までと受講する学生の層が幅広いため、学生の授業中の反応やコミュニケーションカードの振り返りを見ながら微調整しつつ 15 回の講義を進めていた。アンケートの結果を見るとおおむねうまくいったのではないかと感じている。

特に教養教育科目であるので、狭く深くというよりも基礎的な概念から広く浅く、ただ必要な個所は丁寧に整理しながらという意識で講義を展開したこともあり、学生たちがあいまいに理解していたこともしっかりと確認でき、つながりがよく分からない関係も整理できたのではないかと思う。

グループワークも所々に取り入れ、特に複雑な概念を日常の生活の場面で考えることができるようにと設定したが、概ねうまくいったのではないだろうか。

検討会では、約 5～6 人の班で、学生一人一人のエピソードを様々に味わうことが目標ですが、時にはコロナの欠席者で参加数が少なった折でも、活発に自分の考えを発表する受講生が多く、口数の少ない学生も授業後半にはとても打ち解けてきて発表する姿には個々の学生の成長を感じることができました。「人の考えが聞けて良かった」「保育の正解はたぶんこうだろうな‥と見ていても、決して保育の解答なんてないんだということがわかった」「保育の展開や子どもへの寄り添いは保育者一人ひとりみんな違っていいんだということがわかった」「いろいろな園の様子や学生の体験が知れてよかった」と、この科目が終わった頃の振り返りに感じた学生がほとんどでした。学生も保育の質の高さが望めたかと感じました。

改善点については、経験が伴わないがための意見を目にしたときに、その時はこうなんだよと自分の考えを押し付けるのではなく、この現段階で学び合う、語り合うことの意義をもっと考えていきたいと思っています。先を焦らず学生を温かく見ていきたいと思います。また、エピソード記述による報告というのはそういうことを大事にしていかなくてはならないことを改めて心に念じた次第です。

「学生自身の評価」（１～５）の中では、みなさんが「新しい知識や技能」の習得に意欲を持ち、積極的に熱心に取り組んでくれたことがわかります。それは、実際にその通りでした。疲れの出る５限目で、終了が１８時前になるにもかかわらず、みなさんは大変しっかり出席してくれました。実習等の「公欠」以外は欠席無しの人も含めて、多くの人が全出席でした。（うれしい驚きです。）

「コロナ禍の制約」もありながら、ワークや話し合いには極めて積極的に臨み、説明の段階からしっかり聞いてくれているのがわかりました。取り組みはいつもスムーズに楽しく盛り上がりました。考察やふりかえりも充実していました。みなさんの授業を受けている時の姿が、強く印象に残っています。

学生には１，２節ごとに読んでもらって、そこから考えてほしいテーマを問いかけるという手法を取った。ある程度形式の整った専門書を読むことを学ぶ機会は大学時代が最後になる学生も多いであろう。そのこともあって、このような機会を提供し続けることは大学教育の根幹であると考えている。まとまった文章を読むことに抵抗感のある学生は多く、読んで考えることは地道な作業で、授業としても地味な取り組みであるが、問いの内容や方法を吟味しながらできるだけ続けていきたいと考えている。

ブックトークの企画はおおむね学生は意欲的に取り組んでいた。ブックトークの企画で用いた人形の使い道を学生が探していて、消毒を呼びかけるディスプレイとして再利用されたのは予想外の興味深い展開であった。

指導の方法だけでなく一つ一つの言葉がけや姿勢等が、受け手である学生にどう届いて伝わっているかを気づく機会ともなりました。授業改善や授業に向かう姿勢の大切さを痛感するとともに、今後の授業に臨むにあたってのモチベーションアップに大きくつながるように感じております。今季頂いたアンケートの結果及びコメントを踏まえて、自分自身の授業開発力や指導力の育成・向上につなげていきたいと考える。またスキルを磨き授業の質を高めることで、学生にお返しができればと考える。

今後の課題として、次年度、自分自身が担当させていただく同じ科目の評価と比較することで、今回の自分自身の課題が、次年度に、どう反映されたか、あるいはされていなかったのかについても、ぜひ系統的に分析させていただきたいと考える。

指導の方法だけでなく一つ一つの言葉がけや姿勢等が、受け手である学生にどう届いて伝わっているかを気づく機会ともなりました。授業改善や授業に向かう姿勢の大切さを痛感するとともに、今後の授業に臨むにあたってのモチベーションアップに大きくつながるように感じております。今季頂いたアンケートの結果及びコメントを踏まえて、自分自身の授業開発力や指導力の育成・向上につなげていきたいと考える。またスキルを磨き授業の質を高めることで、学生にお返しができればと考える。

今後の課題として、次年度、自分自身が担当させていただく同じ科目の評価と比較することで、今回の自分自身の課題が、次年度に、どう反映されたか、あるいはされていなかったのかについても、ぜひ系統的に分析させていただきたいと考える。

Ⅳ　キャンパスライフの調査

「キャンパスライフに関する調査」は、本学に在学している学生の学生生活に対する満足度を図り、要望などを知ることを目的に毎年１回実施している。一昨年度まで、アンケート用紙に記入して提出する形式であったのが、昨年度からオンライン回答に変更した。今年度は、学生への告知の機会を増やすなどの工夫をして回答数の回復が見られたが、まだ全体の３分の２程度の回答数である。全体的に記述による回答も減少している。来年度も、より多くの学生からの回答を得られるようにさらに工夫したい。

実施については、全学生を対象に 11 月 30 日（水）～12 月 16 日（金）の期間で行った。アンケートの構成は「1. 今年度の授業科目、カリキュラムや履修登録について」「2. 本学での学生生活について」「3. 本学の施設・設備について」「4. 本学の好きなところ、満足なところ」となっている。「1.」～「3.」は「あてはまる」～「あてはまらない」を「④」「③」「②」「①」の 4 段階の選択肢を選ぶ形式の質問と、それぞれに関する要望について書く自由記述形式の質問を用意している。また「4.」は自由記述形式の質問でのみ構成している。

回答者数は 1 回生 72 名、2 回生 60 名、3 回生 57 名、4 回生 46 名、合計 235 名となっている。

このアンケートの結果については集計後全教職員に対して示され、各部署で関係する箇所のデータを分析し、業務に生かすために活用されている。また、学生にも結果の概要と主な要望についての見解や取り組み状況等について２月に全員に広報している。

１．今年度の授業科目、カリキュラムや履修登録について

この項目では今年度の授業科目、カリキュラムや履修登録について尋ねている。質問項目は以下に示すようになっている。

(1) 学生参加形式の授業が多かった。
(2) 予習や復習が必要な授業が多かった。
(3) 方法や技術に工夫をしている授業や教員が多かった。
(4) 興味や関心を持てる授業が多く設定されていた。
(5) 計画的な履修が可能となるような時間割だった。
(6) 履修登録は円滑な手続きができた。

結果は次に示す表のようになった。今年度の回答数が左に、昨年度の回答数が右に示されている。

各設問の選択肢（ ④あてはまる　③ややあてはまる　②あまりあてはまらない　①あてはまらない ）

① 学生参加形式の授業が多かった

＜今年度＞	④	③	②	①
全体（235 名）	100	117	18	0
	42.6%	49.8%	7.7%	0.0%
1 回生（72 名）	32	35	5	0
	44.4%	48.6%	6.9%	0.0%
2 回生（60 名）	22	36	2	0
	36.7%	60.0%	3.3%	0.0%
3 回生（57 名）	27	24	6	0
	47.4%	42.1%	10.5%	0.0%
4 回生（46 名）	19	22	5	0

＜昨年度＞	④	③	②	①
全体（１９２名）	74	95	20	3
	38. 5%	49. 5%	10. 4%	1. 6%
１回生（７２名）	26	38	8	0
	36. 1%	52. 8%	11. 1%	0. 0%
２回生（４５名）	22	22	1	0
	48. 9%	48. 9%	2. 2%	0. 0%
３回生（３９名）	21	17	1	0
	53. 8%	43. 6%	2. 6%	0. 0%
４回生（３６名）	5	18	10	3

	41.3%	47.8%	10.9%	0.0%		13.9%	50.0%	27.8%	8.3%

② 予習や復習が必要な授業が多かった

＜今年度＞	④	③	②	①	＜昨年度＞	④	③	②	①
全体（235名）	28	106	82	19	全体（１９２名）	25	88	72	7
	11.9%	45.1%	34.9%	8.1%		13.0%	45.8%	37.5%	3.6%
1回生（72名）	8	36	23	5	１回生（７２名）	13	29	28	2
	11.1%	50.0%	31.9%	6.9%		18.1%	40.3%	38.9%	2.8%
2回生（60名）	12	29	16	3	２回生（４５名）	6	22	16	1
	20.0%	48.3%	26.7%	5.0%		13.3%	48.9%	35.6%	2.2%
3回生（57名）	5	27	22	3	３回生（３９名）	4	24	11	0
	8.8%	47.4%	38.6%	5.3%		10.3%	61.5%	28.2%	0.0%
4回生（46名）	3	14	21	8	４回生（３６名）	2	13	17	4
	6.5%	30.4%	45.7%	17.4%		5.6%	36.1%	47.2%	11.1%

③ 方法や技術に工夫をしている授業や教員

＜今年度＞	④	③	②	①	＜昨年度＞	④	③	②	①
全体（235名）	53	125	53	4	全体（１９２名）	38	109	37	8
	22.6%	53.2%	22.6%	1.7%		19.8%	56.8%	19.3%	4.2%
1回生（72名）	18	35	18	1	１回生（７２名）	21	37	12	2
	25.0%	48.6%	25.0%	1.4%		29.2%	51.4%	16.7%	2.8%
2回生（60名）	10	40	9	1	２回生（４５名）	8	29	8	0
	16.7%	66.7%	15.0%	1.7%		17.8%	64.4%	17.8%	0.0%
3回生（57名）	14	29	13	1	３回生（３９名）	7	27	4	1
	24.6%	50.9%	22.8%	1.8%		17.9%	69.2%	10.3%	2.6%
4回生（46名）	11	21	13	1	４回生（３６名）	2	16	13	5
	23.9%	45.7%	28.3%	2.2%		5.6%	44.4%	36.1%	13.9%

④ 興味や関心を持てる授業が多い

＜今年度＞	④	③	②	①	＜昨年度＞	④	③	②	①
全体（235名）	59	128	40	8	全体（１９２名）	37	114	34	7
	25.1%	54.5%	17.0%	3.4%		19.3%	59.4%	17.7%	3.6%
1回生（72名）	18	39	14	1	１回生（７２名）	21	38	10	3
	25.0%	54.2%	19.4%	1.4%		29.2%	52.8%	13.9%	4.2%
2回生（60名）	14	38	4	4	２回生（４５名）	5	32	8	0
	23.3%	63.3%	6.7%	6.7%		11.1%	71.1%	17.8%	0.0%
3回生（57名）	16	27	12	2	３回生（３９名）	9	27	2	1
	28.1%	47.4%	21.1%	3.5%		23.1%	69.2%	5.1%	2.6%
4回生（46名）	11	24	10	1	４回生（３６名）	2	17	14	3
	23.9%	52.2%	21.7%	2.2%		5.6%	47.2%	38.9%	8.3%

⑤ 計画的な履修が可能となるような時間割

＜今年度＞	④	③	②	①	＜昨年度＞	④	③	②	①
全体（235名）	48	100	58	29	全体（１９２名）	37	86	48	21

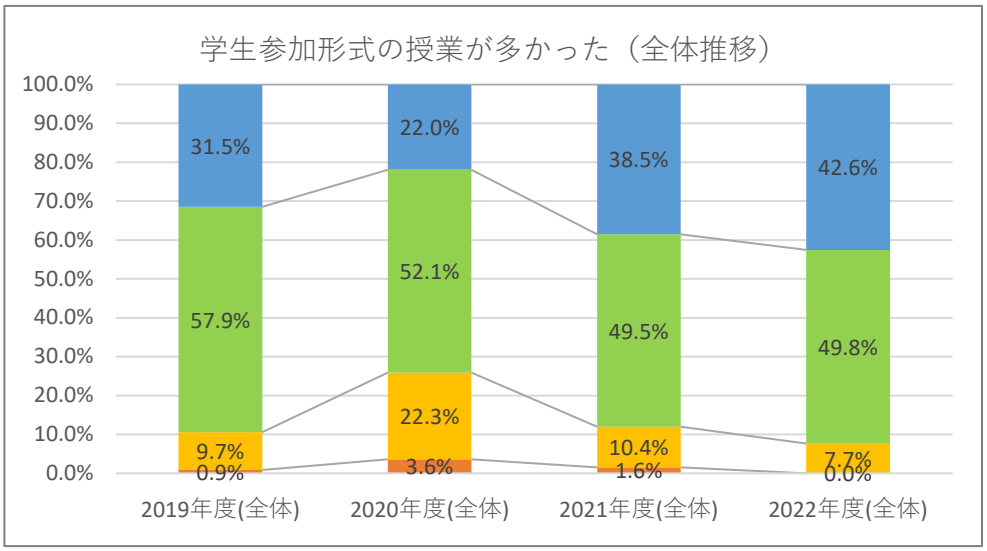
	20.4%	42.6%	24.7%	12.3%		19. 3%	44. 8%	25. 0%	10. 9%
1 回生（72 名）	17	30	17	8	1 回生（７２名）	19	35	12	6
	23.6%	41.7%	23.6%	11.1%		26. 4%	48. 6%	16. 7%	8. 3%
2 回生（60 名）	9	27	19	5	2 回生（４５名）	3	18	20	4
	15.0%	45.0%	31.7%	8.3%		6. 7%	40. 0%	44. 4%	8. 9%
3 回生（57 名）	10	22	13	12	3 回生（３９名）	9	19	6	5
	17.5%	38.6%	22.8%	21.1%		23. 1%	48. 7%	15. 4%	12. 8%
4 回生（46 名）	12	21	9	4	4 回生（３６名）	6	14	10	6
	26.1%	45.7%	19.6%	8.7%		16. 7%	38. 9%	27. 8%	16. 7%

⑥　履修登録は円滑な手続きができた

＜今年度＞	④	③	②	①	＜昨年度＞	④	③	②	①
全体（235 名）	56	106	59	14	全体（１９２名）	49	92	37	14
	23.8%	45.1%	25.1%	6.0%		25. 5%	47. 9%	19. 3%	7. 3%
1 回生（72 名）	21	31	17	3	1 回生（７２名）	25	33	11	3
	29.2%	43.1%	23.6%	4.2%		34. 7%	45. 8%	15. 3%	4. 2%
2 回生（60 名）	12	30	14	4	2 回生（４５名）	7	25	8	5
	20.0%	50.0%	23.3%	6.7%		15. 6%	55. 6%	17. 8%	11. 1%
3 回生（57 名）	9	24	18	6	3 回生（３９名）	10	19	6	4
	15.8%	42.1%	31.6%	10.5%		25. 6%	48. 7%	15. 4%	10. 3%
4 回生（46 名）	14	21	10	1	4 回生（３６名）	7	15	12	2
	30.4%	45.7%	21.7%	2.2%		19. 4%	41. 7%	33. 3%	5. 6%

＜授業科目、カリキュラムや履修登録＞の各質問項目については、前半が授業内容等について尋ねており、後半はカリキュラムや履修登録に関する質問である。

「① 参加体験（アクティブラーニング）」に係る項目について、下に評価推移グラフをつける。グラフの上から④「あてはまる」～①「あてはまらない」の％であり、年度変化もわかる。



一昨年度（グラフ 2020 年度）はコロナ感染防止の視点から一部が遠隔授業になり、大学の授業でもグループ討議が難しくなった中で評価が大きく下がっていたが、昨年度は遠隔授業の時期が長くあった中でも、各教員の工夫と努力により大きく回復した。今年度はそれがさらに向上し、コロナ感染が広がる以前の 2019 年度よりも高い評価となっている。肯定的な回答の割合が 92.4%あり、特に否定的な回答の中の「あてはまらない」とした学生数が大学全体で 0 名であった。アクティブラーニングを重視した授業実践が、学生に明確に認識され評価されている結果と言える。もちろん、そういう参加体験型の授業実践が行えている背景には、保健センターや事務室のきめこまやかな感染対策の努力がある。その他、「授業の工夫がある」や「興味関心が持てる」等の指導方法などに関する項目についても肯定回答が 8 割近い割合を占めており、ここにも教員の努力がうかがえる。

その中で、「予習や復習が必要な授業が多かった」の項目の肯定割合が例年低い。しかし、授業等の課題に追われている学生の様子をよく見るにつけて、それが各授業全体での取り組みとはなっていないということかと思われる。

数年前から全ての項目において肯定的な回答（「あてはまる」「ややあてはまる」）の割合が継続的に増加していたが、一昨年度・昨年度と全体的には横ばいになっていた。それが、今年度また上昇傾向が見られるようになった。

時間割や履修登録の項目については、4 年前から否定的な回答（「あまりあてはまらない」「あてはまらない」）の割合がアンケート全体の中でも極めて多かったが、一昨年度・昨年度と継続して評価は改善されてきていたが、今年度はほぼ横ばいである。学年としての変化を見ると、1 回生から 2 回生、2 回生から 3 回生と学年が進むと評価が下がっている。選択の仕方への不満や難しさを感じるようだ。4 回生になると履修時の優先などがあるためか、不満は減少している。自由記述の内容を見ると、以前からと同じ内容の不満や要望として「同じ時間に取るべき科目が被っている」「抽選をやめてほしい（実習・免許など、必要な人を優先にしてほしい）」「開講数・受講者の制限数を増やしてほしい」「計画的な履修ができない」「取るべき科目・先修条件・卒業必修科目等を履修登録のページでわかるようにしてほしい」等が書かれている。学生自身の問題も一部あるとは考えられるが、これらの要望の中には履修登録の説明時の工夫によって、よりわかりやすく伝えられるものもあると思える。さらに改善できること必要のあるものから、学生の声に応える取り組みが継続して求められる。

2．本学での学生生活について

この項目では本学での学生生活について尋ねている。質問項目は以下に示すようになっている。

(1) 研究室方式なので、気軽に教員と話し合っている。
(2) 事務職員の対応に満足している。
(3) 休講・補講などの情報が分りやすく提供されている。
(4) 心身の健康管理のための相談室や保健室は利用しやすい。
(5) 採用試験対策の講座などのサポート体制が充実している。
(6) 実習やボランティアなどへの支援体制が充実している。

結果は次に示す表のようになっている。

各設問の選択肢（ ④あてはまる　③ややあてはまる　②あまりあてはまらない　①あてはまらない ）

① 気軽に教員と話し合っている

＜今年度＞	④	③	②	①
全体（235 名）	127	74	25	9
	54.0%	31.5%	10.6%	3.8%
1 回生（72 名）	38	18	13	3
	52.8%	25.0%	18.1%	4.2%
2 回生（60 名）	27	24	6	3
	45.0%	40.0%	10.0%	5.0%
3 回生（57 名）	27	25	3	2
	47.4%	43.9%	5.3%	3.5%
4 回生（46 名）	35	7	3	1
	76.1%	15.2%	6.5%	2.2%

＜昨年度＞	④	③	②	①
全体（１９２名）	110	63	16	3
	57.3%	32.8%	8.3%	1.6%
１回生（７２名）	45	22	4	1
	62.5%	30.6%	5.6%	1.4%
２回生（４５名）	19	19	5	2
	42.2%	42.2%	11.1%	4.4%
３回生（３９名）	23	12	4	0
	59.0%	30.8%	10.3%	0.0%
４回生（３６名）	23	10	3	0
	63.9%	27.8%	8.3%	0.0%

② 事務職員の対応に満足している

＜今年度＞	④	③	②	①
全体（235 名）	114	94	23	4
	48.5%	40.0%	9.8%	1.7%
1 回生（72 名）	37	30	3	2
	51.4%	41.7%	4.2%	2.8%
2 回生（60 名）	28	23	8	1
	46.7%	38.3%	13.3%	1.7%
3 回生（57 名）	22	24	10	1
	38.6%	42.1%	17.5%	1.8%
4 回生（46 名）	27	17	2	0
	58.7%	37.0%	4.3%	0.0%

＜昨年度＞	④	③	②	①
全体（１９２名）	99	75	14	4
	51.6%	39.1%	7.3%	2.1%
１回生（７２名）	43	23	4	2
	59.7%	31.9%	5.6%	2.8%
２回生（４５名）	15	21	7	2
	33.3%	46.7%	15.6%	4.4%
３回生（３９名）	23	14	2	0
	59.0%	35.9%	5.1%	0.0%
４回生（３６名）	18	17	1	0
	50.0%	47.2%	2.8%	0.0%

③ 休講・補講などの情報が分りやすく提供

＜今年度＞	④	③	②	①
全体（235 名）	62	112	43	18
	26.4%	47.7%	18.3%	7.7%
1 回生（72 名）	26	33	9	4
	36.1%	45.8%	12.5%	5.6%
2 回生（60 名）	13	27	15	5
	21.7%	45.0%	25.0%	8.3%
3 回生（57 名）	13	29	10	5
	22.8%	50.9%	17.5%	8.8%
4 回生（46 名）	10	23	9	4
	21.7%	50.0%	19.6%	8.7%

＜昨年度＞	④	③	②	①
全体（１９２名）	57	75	49	11
	29.7%	39.1%	25.5%	5.7%
１回生（７２名）	28	34	9	1
	38.9%	47.2%	12.5%	1.4%
２回生（４５名）	10	16	15	4
	22.2%	35.6%	33.3%	8.9%
３回生（３９名）	13	16	9	1
	33.3%	41.0%	23.1%	2.6%
４回生（３６名）	6	9	16	5
	16.7%	25.0%	44.4%	13.9%

④ 相談室や保健室は利用しやすい

＜今年度＞	④	③	②	①
全体（235 名）	106	92	33	4
	45.1%	39.1%	14.0%	1.7%

＜昨年度＞	④	③	②	①
全体（１９２名）	88	75	25	4
	45.8%	39.1%	13.0%	2.1%

1回生（72名）	30	31	10	1	1回生（７２名）	36	27	7	2
	41.7%	43.1%	13.9%	1.4%		50.0%	37.5%	9.7%	2.8%
2回生（60名）	28	25	5	2	2回生（４５名）	16	22	7	0
	46.7%	41.7%	8.3%	3.3%		35.6%	48.9%	15.6%	0.0%
3回生（57名）	25	20	11	1	3回生（３９名）	20	16	3	0
	43.9%	35.1%	19.3%	1.8%		51.3%	41.0%	7.7%	0.0%
4回生（46名）	23	16	7	0	4回生（３６名）	16	10	8	2
	50.0%	34.8%	15.2%	0.0%		44.4%	27.8%	22.2%	5.6%

⑤　採用試験対策のサポート体制が充実

＜今年度＞	④	③	②	①	＜昨年度＞	④	③	②	①
全体（235名）	74	129	28	4	全体（１９２名）	66	104	21	1
	31.5%	54.9%	11.9%	1.7%		34.4%	54.2%	10.9%	0.5%
1回生（72名）	23	39	8	2	1回生（７２名）	30	38	4	0
	31.9%	54.2%	11.1%	2.8%		41.7%	52.8%	5.6%	0.0%
2回生（60名）	16	39	5	0	2回生（４５名）	14	25	6	0
	26.7%	65.0%	8.3%	0.0%		31.1%	55.6%	13.3%	0.0%
3回生（57名）	15	29	11	2	3回生（３９名）	11	23	5	0
	26.3%	50.9%	19.3%	3.5%		28.2%	59.0%	12.8%	0.0%
4回生（46名）	20	22	4	0	4回生（３６名）	11	18	6	1
	43.5%	47.8%	8.7%	0.0%		30.6%	50.0%	16.7%	2.8%

⑥　実習などへの支援体制が充実

＜今年度＞	④	③	②	①	＜昨年度＞	④	③	②	①
全体（235名）	75	122	30	8	全体（１９２名）	67	92	26	7
	31.9%	51.9%	12.8%	3.4%		34.9%	47.9%	13.5%	3.6%
1回生（72名）	22	41	8	1	1回生（７２名）	30	33	6	3
	30.6%	56.9%	11.1%	1.4%		41.7%	45.8%	8.3%	4.2%
2回生（60名）	17	34	6	3	2回生（４５名）	14	19	10	2
	28.3%	56.7%	10.0%	5.0%		31.1%	42.2%	22.2%	4.4%
3回生（57名）	15	28	11	3	3回生（３９名）	12	25	2	0
	26.3%	49.1%	19.3%	5.3%		30.8%	64.1%	5.1%	0.0%
4回生（46名）	21	19	5	1	4回生（３６名）	11	15	8	2
	45.7%	41.3%	10.9%	2.2%		30.6%	41.7%	22.2%	5.6%

＜本学での学生生活＞の各質問項目については、ここ数年ほぼ全ての項目で肯定的評価が８割を大きく超えており、今年度もほぼ変わらない。

中でも「事務職員の対応に満足している」という項目は、かつて厳しく評価されていた状態から継続して評価が高くなり、今では全体の中でも高い評価の項目になっている。また、「休講・補講などの情報が分りやすく提供されている」についても以前は厳しい評価を受けていたが、、ここ数年評価の向上が継続しており、今年度は肯定的評価が７割を超えた。自由記述での苦情も、ほとんど見かけなくなっている。ともに事務職員の努力の成果と言える。

「気軽に教員と話し合っている」「相談室・保健室の利用」という項目については、毎年安定して極めて高い評価を受けている。自由記述の内容を見ても、「先生との距離が本当に近い」「先生方が親身に相談に乗ってくれる」「親切丁寧」「先生（保健室）が相談しやすい」「保健室がしっかりしている」等の声が多くある

特に、３、４回生の評価が極めて高いのは、進路支援に担当教員はもちろんゼミの教員も含めて努力した結果と考えられる。

「採用試験の対策サポート体制」についても、昨年度に評価が大きく向上したのに続いて今年も評価されている。１、２回生にも評価されているのは、基礎演習等でも進路の講演会や情報提供を行い、公立幼保受験の勉強会や春期夏期の「教採対策講座」の実施と参加呼びかけなどの取り組みが反映された結果と考えられる。今年は、特に４回生からの肯定的評価が９割を超え、当然それは進路実績の結果にもしっかり結び付いている。同様に「実習などへの支援体制」も、特に４回生から高い評価を受けている。

以上の項目は、すべて学生に直接かかわる担当者一人ひとりの努力の結果が反映されるものであり、日常的な学生支援の実践がしっかりできていることの表れと言える。

３．本学の施設・設備について

この項目では本学での学生生活について尋ねている。質問項目は以下に示すようになっている。

(1) 図書館の施設・設備に満足している。
(2) 学生食堂の施設・内容に満足している。
(3) 講義室には学習に集中できる設備が整っている。
(4) 自習のためのスペースや環境が整っている。
(5) ピアノのスキルアップのための施設や設備が整っている。

結果は次に示す表のようになっている。

各設問の選択肢（ ④あてはまる　③ややあてはまる　②あまりあてはまらない　①あてはまらない ）

① 図書館の施設・設備に満足している

＜今年度＞	④	②	①	①
全体（235 名）	115	96	14	10
	48.9%	40.9%	6.0%	4.3%
1 回生（72 名）	36	26	6	4
	50.0%	36.1%	8.3%	5.6%
2 回生（60 名）	29	24	3	4
	48.3%	40.0%	5.0%	6.7%
3 回生（57 名）	24	28	4	1
	42.1%	49.1%	7.0%	1.8%
4 回生（46 名）	26	18	1	1
	56.5%	39.1%	2.2%	2.2%

＜昨年度＞	④	③	②	①
全体（１９２名）	87	84	12	9
	45.3%	43.8%	6.3%	4.7%
１回生（７２名）	29	30	7	6
	40.3%	41.7%	9.7%	8.3%
２回生（４５名）	24	18	1	2
	53.3%	40.0%	2.2%	4.4%
３回生（３９名）	17	22	0	0
	43.6%	56.4%	0.0%	0.0%
４回生（３６名）	17	14	4	1
	47.2%	38.9%	11.1%	2.8%

② 学生食堂の施設・内容に満足している

＜今年度＞	④	③	②	①
全体（235 名）	84	82	38	31
	35.7%	34.9%	16.2%	13.2%

＜昨年度＞	④	③	②	①
全体（１９２名）	62	68	42	20
	32.3%	35.4%	21.9%	10.4%

1回生（72名）	35	21	9	7	1回生（７２名）	25	22	15	10
	48.6%	29.2%	12.5%	9.7%		34.7%	30.6%	20.8%	13.9%
2回生（60名）	16	23	13	8	2回生（４５名）	19	19	6	1
	26.7%	38.3%	21.7%	13.3%		42.2%	42.2%	13.3%	2.2%
3回生（57名）	18	20	8	11	3回生（３９名）	7	18	12	2
	31.6%	35.1%	14.0%	19.3%		17.9%	46.2%	30.8%	5.1%
4回生（46名）	15	18	8	5	4回生（３６名）	11	9	9	7
	32.6%	39.1%	17.4%	10.9%		30.6%	25.0%	25.0%	19.4%

③　講義室には学習に集中できる設備が整う

＜今年度＞	④	③	②	①	＜昨年度＞	④	③	②	①
全体（235名）	80	121	31	3	全体（１９２名）	68	97	25	2
	34.0%	51.5%	13.2%	1.3%		35.4%	50.5%	13.0%	1.0%
1回生（72名）	27	38	6	1	1回生（７２名）	32	31	8	1
	37.5%	52.8%	8.3%	1.4%		44.4%	43.1%	11.1%	1.4%
2回生（60名）	23	29	6	2	2回生（４５名）	14	26	5	0
	38.3%	48.3%	10.0%	3.3%		31.1%	57.8%	11.1%	0.0%
3回生（57名）	17	29	11	0	3回生（３９名）	13	23	3	0
	29.8%	50.9%	19.3%	0.0%		33.3%	59.0%	7.7%	0.0%
4回生（46名）	13	25	8	0	4回生（３６名）	9	17	9	1
	28.3%	54.3%	17.4%	0.0%		25.0%	47.2%	25.0%	2.8%

④　自習のためのスペースや環境が整っている。

＜今年度＞	④	③	②	①	＜昨年度＞	④	③	②	①
全体（235名）	104	105	20	6	全体（１９２名）	97	68	22	5
	44.3%	44.7%	8.5%	2.6%		50.5%	35.4%	11.5%	2.6%
1回生（72名）	37	32	3	0	1回生（７２名）	46	20	5	1
	51.4%	44.4%	4.2%	0.0%		63.9%	27.8%	6.9%	1.4%
2回生（60名）	26	27	5	2	2回生（４５名）	20	21	4	0
	43.3%	45.0%	8.3%	3.3%		44.4%	46.7%	8.9%	0.0%
3回生（57名）	22	26	7	2	3回生（３９名）	21	13	4	1
	38.6%	45.6%	12.3%	3.5%		53.8%	33.3%	10.3%	2.6%
4回生（46名）	19	20	5	2	4回生（３６名）	10	14	9	3
	41.3%	43.5%	10.9%	4.3%		27.8%	38.9%	25.0%	8.3%

⑤　ピアノのスキルアップのための施設や設備

＜今年度＞	④	③	②	①	＜昨年度＞	④	③	②	①
全体（235名）	134	84	13	4	全体（１９２名）	120	58	12	2
	57.0%	35.7%	5.5%	1.7%		62.5%	30.2%	6.3%	1.0%
1回生（72名）	50	19	3	0	1回生（７２名）	53	17	1	1
	69.4%	26.4%	4.2%	0.0%		73.6%	23.6%	1.4%	1.4%
2回生（60名）	39	18	1	2	2回生（４５名）	28	13	4	0
	65.0%	30.0%	1.7%	3.3%		62.2%	28.9%	8.9%	0.0%

3回生（57名）	23	26	7	1
	40.4%	45.6%	12.3%	1.8%
4回生（46名）	22	21	2	1
	47.8%	45.7%	4.3%	2.2%

3回生（３９名）	22	15	2	0
	56.4%	38.5%	5.1%	0.0%
4回生（３６名）	17	13	5	1
	47.2%	36.1%	13.9%	2.8%

＜本学の施設・設備＞の各質問項目については、ほとんどの項目で例年９割前後の肯定的評価がある。特に、肯定的な回答の中の、「あてはまる」という積極的な評価の割合が高い項目が多い。今年度もその状況に大きな変化はない。

以前までは、施設設備の充実化が本学の課題の一つであった。そのため、近年そして今年度も施設設備の充実化を進め、利用の方法や範囲についての利便性・柔軟性も高めてきた。評価結果には、その効果が反映していると思われる。具体的には、学生の要望に応じた「一部教室へのタブレットの配備」「自習スペースの拡大」「自主学習に使えるパソコンの増加」や「ピアノの練習環境の整備」などである。そして、この施設設備への満足度の向上には「清掃が行き届き、いつもきれいな状態が保たれている」ことも大きく寄与していると考えられる。

施設設備の中では、「学生食堂の施設・内容」への満足度が毎年低い評価が続いている。今年は、１回生の満足度が例年より高いので少しだけ向上しているが、それでも肯定評価は７割である。食堂の施設については、拡大や移転は困難である。しかし、自由記述を見ると、主にそれはメニュー等の営業形態に関してのものである。コロナの状況下で調理販売が難しくなっている影響もあるようだ。短大にある食堂の利用促進や現状で可能な改善策を検討することも必要である。

自由記述では、毎年多く書かれている「wi- fi を使える環境の要望」とともに、「通学バスの時間や運行の範囲への要望」も見られた。「通学バス」についてはこれまで要望の強かった項目で、今年度実現させたせ策の一つであるが、新たに求められている課題について検討しながら学生に報告や説明をしていく必要がある。

４．その他、本学のいいところ等の自由記述

ここでは自由記述で、「その他、本学のいいところ等」について聞いている。

記述内容からは、「教員との関係、相談しやすさ、距離の近さ」「職員の親身で優しい対応」「少人数制の良さ」「施設の充実と清潔さ」について、例年多くの学生が評価し満足していることが伝わってくる。今年度も同様である。特に、学年が上がるほど「教員との良い関係、支援やサポートの充実」についての内容が中心に記述されている。論文作成や実習や就職試験関係の指導で、特に実感できているようである。

本学が「小規模」な大学ゆえの「少人数制」をうまく活かした人的・物的環境を作り、学生生活の充実を図っている成果であると言える。とりわけ、「少人数制」は本年度のコロナ禍においても大学で対面授業を実施できたことに結びついており、それも満足度の向上につながっている。それを支えていたのは、特に保健センターや事務室の方が各教室の着席制限の表示や机の配置の工夫、消毒の徹底等という感染対策をされた努力である。また、教職員だけでなく、警備の方、清掃担当の方、食堂の従業員の方等、学生にかかわる多くの人の柔らかい雰囲気の中で「居心地よく」学べる環境が作られてもいることも読み取れる。ここ２年、感染防止対策の徹底のために少なくなっていた「友人・先輩後輩との良好な人間関係」についての記述も復活してきたのは喜ばしい事である。

Ｖ　ＦＤ・ＳＤ活動

令和４年度のＦＤ活動として、８月に、授業の中にアクティブラーニングを積極的導入に関するための「研修会」を行った。11 月に全教員による公開授業を実施し、その見学への感想コメントの提出を求めた。12 月にそれを冊子として配布し、ふりかえりの会を行った。

ＳＤ活動としては、ＳＤ研修を実施した。

１．アクティブラーニング研修会

8 月 17 日に、本学の白川晴美先生を講師として、「子どもを尊重する保育」として、以下の内容で春季授業研修会が行われた。

テーマ：「子どもを尊重する保育」を題材として、アクティブラーニングを積極的に取り入れた授業実践の考察をする

形式：公開研究授業

内容： 1989 年に「子どもの権利条約」は国連で採択され、日本は 1994 年に批准した。児童福祉法や保育所保育指針には、「児童の権利」「最善の利益」という言葉が総則に書かれている。子どもの最善の利益を配慮した保育を実践していくことが保育者には求められている。その為には、「子どもを一人の人間として尊重する」ことが根本としてある。

本発表では、アクティブラーニングの手法を取り入れた「総合演習保育Ｉ」「保育実践演習」の授業実践の事例を報告し、「子どもを尊重する」という視点が学生に与える教育的効果を明らかにすることを目的とする。

レジメ：

１．授業におけるアクティブラーニング
　１）アクティブラーニングの定義
　２）導入の背景
　３）授業の中で伸ばしたい力

２．子どもの権利条約
　１）子どもの権利条約の認知度
　２）十分に保証されているか
　３）大切にしたい子どもの権利

３．子どもを尊重する保育
　１）子どもを尊重する保育とは
　２）２回生の授業（総合演習保育Ｉ）の取り組み
　３）３回生の授業（保育実践演習）の取り組み

４．研修のふりかえり・まとめ
　１）学生の授業の感想
　２）授業における教育的効果

研修の概要

授業の中での積極的なアクティブラーニングの導入例が示された。スマホを使った例としてメンチメーターというアプリを使い、学生に意見を共有させたり集約したりできる機能が紹介された。同様に、ＫＪ法に

よって Google のジャムボード等を活用しながら、学生の意見を前の画面で整理していく方法などが紹介された

授業の中で伸ばしたい力としては、「進んで学ぶ力」「自分を表現する力」「課題を解決する力」の３点があげられた。

次に、子どもの権利条約の認知度や実現度について、研修に参加している教員にも問いかけやワークがなされた。教員は、２人組で子どもの権利が十分に保障されているかどうかを考察し討議を行い、発表した。

さらに、子どもを尊重する保育の実践にかかわり、「人権擁護のためのセルフチェックリスト（全国保育士会)」を資料としながら、様々な具体的課題について実際の授業場面での展開例が紹介された。参加している教員には、解説とともに事例を使っての体験的・実践的学びが提供された。

授業の中の取り組みとして「前の画面に映る子どもの行動や表情を見ながら、子どもにとって『嬉しい声かけ』『嫌な声かけ』を実際に声に出してみる。」その上で、その声かけが子どもの心へどう影響するかを想像するとともに、自分の普段の声掛けをふりかえる。子どもを主体とすること、自分の言動を意識すること、問題解決に取り組む力を養うこと、そのために有効で実践的な指導を体験できた。

授業において、他にも「子どもが尊重してされていない場面を具体的に 10 個あげ、それらをどう解決するか、グループで考えみんなで共有する」などの課題が紹介された。

質疑応答

・「子どもに対する考え方や対応が悪い園が、良い方向に変わる可能性はあるのか」

問題だと感じた人が、「まず批判すること」でなく、実際に「良い関わりの中で子どもが良い変化をしていくという事実や変化を見せること」で、少しずつ変化していくのではないか。

・「就学前の子どもの着替えやトイレに関するプライバシーなど、現場では配慮がなされているのか」

５歳児も身体測定とか着替えとかを別々に行うことが実践されている。「 恥ずかしいという思いを持った子どもがいる」ことを忘れない意識が大切だ。

・「実習先やボランティア先での子どもへのかかわり方についてチェックリストを用いて振り返ってみて悪い例とかがいろいろ出されてきた時に、どう指導しまとめるのか」

「しんどい、あかんな」で終わらず、「そこには必ず要因がある」と受け止める。その上で、その現実をどう変えたらいいのかを考えること。よくない状況を「嫌だ」で終わらせず、要因解決を考える。それが学生たちの導き出すべき目標となる。

２．公開授業による授業研究

公開授業は、11 月 7 日～11 月 18 日の間に全ての教員が通常授業を 2 回以上公開する形で実施した。各教員の公開予定授業の内容と日程の一覧表を配布し、それぞれの教員が自分の空き時間に合わせて自由に見学する形で行った。その期間に、公開された 40 の授業に対して各教員の見学が実施され、18 名の教員から見学した 37 の授業への感想・コメントが提出された。12 月 14 日に全てのコメントを冊子として全教員に配布し、ふりかえりの機会を持った。

提出された感想の中のいくつかを、それぞれの文章の一部を抜粋して以下に掲載しておく。

・やる気を育てる…というテーマで、動機付けを考え、最後はグループ作業で「演習課題」をすると

いう流れは、学んだことを即実践として考えてみるということです。今学んだことを現実問題として試行してみるというプロセスを通して、より身体に染み入る流れになっているなと感じました。アクティブラーニングの最たるものと感じ入りました。

6つのグループが次々と、壁のホワイトボードに書いていきます。考える時間、わずか5分。まとめて書く時間わずか5分。タイトな時間でどうするのだろうと思っていたら、学生は瞬時に考えをまとめていました。思い浮かばない学生、これでいいかな？と言葉にする学生、それってどういうこと？と質問する学生。様々な姿を見ました。

・マイナスなところではなく良いところに対してコメントをされていました。それぞれ発表する内容をホワイトボードに書かれていたことも分かりやすかったです。「私は」という言葉をつけて発表をするということを促されていたが、そのことで学生に自分がどう思うのかについて人に語るということが出来ているように感じました。また、「大きな声で発表できたやん」「自信もって言えるようになってきたね」と声をかけておられました。

一人ひとりをよく見て成長を感じたことを伝えることは自己肯定感が持てるようになると思いました。学生が主体性・様々な視点を大切にされていた授業でした。

・まず授業の冒頭で「嬉しい先生、困った先生はどんな先生か」学生に考えさせ、そこからどのように幼児に関わっていくべきかを考える展開でした。自分たちの体験を想起することで、学生は一般論ではなく自分事として課題に向き合うことができたのだと思います。その後、嬉しいかかわり方や困った関わり方についての共通点を探り、一般化してから、事例（子どもにどんな声掛けをするか）を考えたので、そのキーワードを手掛かりにすることができたので、学生にとって考える足掛かりになったと思います。

・学生が取り組みやすいシンプルなワークシートを用いておられました。できるだけ多くの学生を当てて答えてもらうように努めておられることや、常に学生に温かい声かけをされているのが印象的でした。また、教材として用意されていた番組動画が興味深く、私も見入っていました。学生たちも感じるところがあったと思うので、番組視聴後に感想を言い合うだけでもグループワークを入れても良かったかもしれません。

・学生が意見を発表する機会も多く設け、発言に対して先生も肯定的なコメントと大きなリアクションを取り、最後は拍手で発言した学生をたたえるということで、発言した学生も喜んでいるようでした。ただ、コロナ禍でマスク着用していることもあり、学生の発言が聞こえづらく、なかなか他の学生にまで意見が共有されづらそうでした。先生も復唱されていましたが、学生の発言をまとめて画面に映すなど何らかの共有する工夫があればいいかと思いました。

・視覚的なプロンプトにより回答を求める方法は、聞くだけでなく視覚的な情報も併せて提示しているので、学生には分かりやすいであろうと感じました。また、他の学生の答えをプロジェクターで出すことで、文章の書き方や答えの考え方を知ることができるのは工夫がされていると思いました。

「当てる」⇒「喋らせる」という点で、学生の発音を訂正しないで正しい音を聞かせている点も工夫されていると思いました。

・電子教科書をプロジェクターで映写し、電子教科書内の映像資料を実際に使って見せておられました。児童がタブレットを持って参加することを想定したお話をされており、現在の学校現場でのICT 教育実践を学生に意識させておられることが印象的でした。このような教科教育法がどの教科についても求められているように考えます。学生も（ごく少数の例外はいましたが）私語やスマホいじりすることなく、授業に取り組んでいました。先生が学生の気を引くようなメリハリある話し方をされ、効果的に映像資料を使っておられたからだと思います。

・まず、発表者がエピソードを読み上げ質疑応答がある。その後、一人ひとりが考察をしてからグループでの考察・話し合いにつながる。次に、各グループからの代表がそれぞれのまとめを発表する。その時、教員が発表の要点をホワイトボードにまとめていく。最後に、全体のまとめをして終了。

学生の意見や考えを生かしながら、集団の一員としての自覚と責任を持って授業を受けている。表情や姿勢が生きており、教室の雰囲気がよい。寝たりスマホを触ったりするような行為が大変生まれにくい授業の空気である。この空気を作れると、学生に注意をすることもなく、柔らかいけれど集中のある空間での授業展開ができると実感した。

３．ＳＤ研修

今年度のＳＤ研修は、9 月に「大学短大統合に向けたワークショップ」を行った。本法人の中期計画に基づき発足した「統合準備室」主催で、職員教員合同で実施した。

外部（学外）で行われる研修については、コロナ感染症のため参加できなかったが、文科省・各教育委員会が行うオンライン研修・説明会には参加（視聴）し、担当課で情報共有を行った。

日常の職員組織の連携は、大学内にとどまらず、併設の短期大学事務とも連携にも努め、月 1 回「合同事務連絡会」を開催して情報の共有を図っている。

お　わ　り　に

今年は、コロナ禍においての学生の学びと安全を両立させるという取り組みも３年目となり、いろいろな面で大学での行事や授業にも回復・改善が進みました。

授業も全ての期間を基本的に対面で行えましたが、この３年間に「遠隔授業研修」としてリモートによる効果的な授業展開の多様な方法や効果的な展開について理解を進められたことは全教員の指導の幅を広げる貴重な機会にもなりました。ZOOM での就職の面接対策や欠席者等へのポータルサイトを通じた課題の指示や提出など、それぞれの取り組みの特性に合った内容への工夫が実践されています。

英語スピーチコンテストや卒業論文発表会、人権研修会などの行事もこれまでの経験を生かしながら、少人数に別れた教室への配信などを活用しながら全体で行えました。大学祭も、各研究室で子どもたちを対象の中心とした各種ゲームや催し等の企画を実施し、地域から多くの人たちに楽しんでもらえるとともに、学生にとっても多くの子どもたちや保護者と触れ合う機会となりました。常磐会短期大学との合同で、体育館やグラウンドでのステージ等を使った様々な企画も実施しました。

これらの取り組みには、本学が小規模大学の特性を生かして以前から授業やゼミを少人数で展開してきたことが大きく寄与しています。それと同時に、一昨年度から続くコロナ感染対策として消毒液の学内の様々な場所への配置や、教室やフロアの座席で横との距離を空けて座るための遮蔽物設置、感染者や濃厚接触者情報の速やかな提供など、事務室や保健センターの工夫と努力がそれを支えてくれました。

キャンパスライフアンケートでは昨年度同様、施設・設備面の充実や利便性向上に関わる事務職員の学びの環境づくりへの継続的な努力とともに、教職員の「親身できめ細やかな指導・支援」が評価されています。

また、学生の進路希望の実現を後押しする各教員の努力もあり、本年度も公立小学校、幼稚園・保育園をめざした学生の多くが合格を果たしました。

今後も新たな形でのコロナ感染防止への対策が求められる中、本学が直面する課題に対応しながら、充実した研究活動と深く実践的な学びを提供できる教育活動を実現することをめざします。そのために、この自己点検・評価の取り組みが大きな力となるものと考えます。

最後になりましたが、本誌発刊に際し、各部署の責任者の方々、研究部の皆さんのご尽力に対し感謝を申し上げます。

研究部長　　佐谷　力

＜編集委員（敬称略）＞

大森　彰	山崎　徳子	昇　慶一
加藤　達雄	笠川　武史	坂口　静子
吉田　健	アレックス・M・林	岡（宮薗）美佳
菅野　真里	帆足　光正	佐谷　力

令和４年度　教育研究活動の現状と課題
－自己点検・評価　報告書－
令和５年４月発行

編集　学校法人常磐会学園　常磐会学園大学
発行　学校法人常磐会学園　常磐会学園大学
〒547-0021
大阪市平野区喜連東１丁目４番12号
電話　06-4302-8880（代表）

印刷　名鉄局印刷株式会社
〒450-0003
名古屋市中村区名駅南3-13-23
電話　052-561-3271